

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Revitalization Movement of the Traditional Tompa Script of the Naxi in Lijiang, Yunnan Province in China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高, 茜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003986">https://doi.org/10.15021/00003986</a>

## 中国麗江納西族における東巴文字復興運動

—1990年代以降を中心に—

高 茜

The Revitalization Movement of the Traditional *Tompa* Script of the Naxi in Lijiang, Yunnan Province in China

Gao Qian

中国雲南省の納西族は古くから漢文化を受容してきたことで知られている。文化的小よび経済的に漢民族から大きな影響を受け、中央からみて周辺民族より進んだいわゆる現代文明を享受してきた少数民族とされている。東巴教は、この納西族に古くから伝わる民族宗教であり、その宗教祭司が用いてきたのが東巴文字である。しかし納西族にとって東巴教および東巴文字に対する思いは、時代とともに変わってきた。とくに1990年代以降における観光業の発展は、納西族と東巴文字の間にもっとも大きな変革をもたらすこととなった。本稿は、麗江納西族と東巴文字の関係について、とくに東巴文字の伝承活動に注目しながら、その変遷を叙述するとともに、変化の要因となる社会的背景を明らかにしようとするものである。

この民族文化としての東巴文化の伝承活動は、中国のほかの少数民族と同様に、中国の少数民族政策と大きく関わっていることは言うまでもない。しかし、東巴文字およびそれをを用いる納西族がおかれている言語的状況は、他の多くの少数民族と比較しても特異なものである。例えば、東巴文字の伝承活動を考察する上で、その宗教的性格や改革開放以後におけるこの地域の観光業の発展などとの深い関係は、中国の少数民族一般に対する言語政策とは同列にして論じる事はできないと考えられる。

そこで本論文では、文化大革命以前における東巴文字の歴史的盛衰、改革開放以降における東巴文字の研究および保護の進展、1990年代以降における東巴文化に対する政策転換、などを時代背景に即して概観し、現在の東巴文字の伝承活動の状況や課題についても論じたい。本来、宗教祭司だけのものであった東巴文字は、現在、観光業を通して麗江納西族の日常生活と深く結びつき、多

---

\* 国立民族学博物館外来研究員

**Key Words** : China, Lijiang, Naxi, *Tompa* Script, *Tompa*

**キーワード** : 中国, 麗江, 納西族, 東巴文字, 復興運動

様な社会的需要に応じて麗江各地で伝承活動が行われている。このような伝承活動は、伝統的な目的や方法とは大きく異なるものであり、今では学校教育にまで導入されつつある。いまだ十分に定着してはいないものの、伝承活動が推進されるなかで、東巴文字が納西族の新たなアイデンティティー形成に影響を与えつつあるといえよう。

It is well known that the Naxi people in Yunnan, China, have been strongly influenced since ancient times by Chinese culture. The Han Chinese have had huge cultural and economic influences on the Naxi, as they have on other ethnic minorities in the south of China, and recently their massive impact is overwhelming the Naxi in terms of modernization. Yet the Naxi have retained some cultural traits to this date, and some are even recovering their foothold through cultural re-interpretation.

The *Tompas*, the priests of the “*Tompa* religion,” regarded as the “ethnic” religion of the Naxi, traditionally used the *Tompa* script exclusively for their religious purposes. But the use of the *Tompa* script almost ceased with the decline of the “*Tompa* religion,” particularly during the course of the political reform movements from 1949 through the Cultural Revolution, and later during the modernization of China. But the recent rise of the tourism industry in Yunnan in the 1990s and after has brought an epoch-making turn to the fate of the *Tompa* script: first, by proving its commercial value in tourism ornaments, and later by reinforcing consciousness among the Naxi of the *Tompa* script as their ethnic symbol.

This paper, after surveying the decline of the *Tompas*' activities and social roles towards the end of the 1970s, describes the rehabilitation of *Tompa* studies in the 80s, which were mainly concentrated on the preservation of old *Tompa* documents. Then the author describes in detail, mainly on the basis of interviews with persons concerned, the appearance of the *Tompa* script in the tourism market, and the development of the revitalization movements of *Tompa* culture, *Tompas*, and the script. In the discussion of these developments against their social background, the favorable attitudes of both the local governments and the political authorities towards the movements are stressed. The use of the *Tompa* script, however, as a working orthography for the Naxi language, which itself is shrinking in everyday usage, is exposed to some serious theoretical questions such as in relation to the existing Latinized (Pingying) orthography of the Naxi language developed in the 1950s. The author further speculates on possible future conflicts between the extended Naxi *Tompa* script movements and China's minority nationality policy, which is, particularly nowadays, reluctant to encourage nationalistic or ethnic awareness among the minorities.

1 はじめに	5 民衆普及への伝承活動
2 東巴文字衰退の過程	5.1 麗江東巴文化博物館における東巴文化の民衆普及
2.1 麗江における東巴教の衰退および伝統における東巴文字の伝承	5.2 民間における東巴文化伝承活動
2.2 建国後の東巴教の形骸化および經典解読の危機	6 東巴祭司の養成活動
3 東巴文字の研究の再開と保護政策の開始	6.1 東巴教祭司養成への経緯——断絶した東巴知識
3.1 東巴文字研究の衰退と再開——文化大革命をはさんで	6.2 雲南省社会科学院東巴文化研究所における東巴養成
3.2 1990年代後半における文化伝承活動への動き——麗江東巴文化博物館の役割の拡大	7 学校教育に導入された文字伝承活動
4 1990年代半ば以降の麗江の東巴文字	7.1 学校教育導入に際して行われた議論——東巴文字と納西語とのかかわり
4.1 東巴文字市場の形成——商品化する東巴文字	7.2 民族言語危機および東巴文字伝承の結び付き
4.2 観光産業と東巴文字	7.3 「方案」の確定・実施および新たな動向
4.3 古城に出現した東巴文字の実態	8 考察

## 1 はじめに

中国雲南省の北西部にある麗江<sup>1)</sup> (図1) には主に納西<sup>2)</sup> 族の人々が生活しており、麗江の独特の納西族文化を構築してきた。近年、麗江は、その自然や世界文化遺産となった古城および納西族文化によって知名度が高まり、世界から多くの注目を浴びている。納西族文化として最も知られているのは、納西族の東巴<sup>3)</sup> 文字であり、日本でもしばしば東巴文字が話題となっている。観光名所としてのイメージをしっかりと築き上げた麗江においては、今日、土産品や各種標識などあらゆる場面で東巴文字を見ることができる。観光客を魅了した東巴文字をめぐり、展示活動と研究活動が強化され、伝承活動と宣伝活動は大規模に進められている。東巴文字が麗江のシンボルとして利用されようとしているのは明らかである。と同時に麗江の納西族に対しても、文化の振興活動が積極的に行われている。

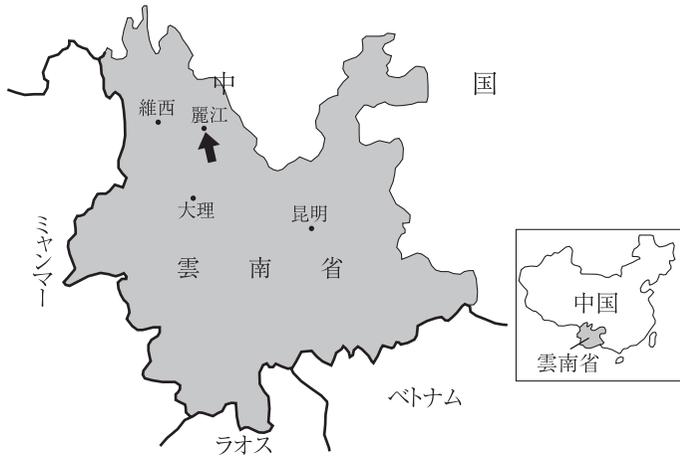


図1 中国雲南省における麗江

東巴文字の研究は早くから世界的に注目され、納西族の歴史・宗教・東巴文字の解釈等の側面において、大きな成果が見られた。中国においては、方国瑜（1995）、李霖燦（2001）、楊福泉（1998、1999、2003）、郭大烈（1999）、李静生（1991、2003）、王世英（2003）ら、欧米においては、洛克（J. F. Rock）（1999）、ピーター・グーラー（P. Goullart）（1963）、孟徹理（C. F. Mckhann）（1998）、雅納特（K. L. Janert）（1998）、K. L. Janert（1965）ら、日本においては、西田龍雄（2001）、伊藤清司（1979）、諏訪哲郎（1994）、山田勝美（1979）らが納西族あるいは東巴文字の研究にかかわってきた。また、日本では王超鷹や浅葉克巳らが著書やインターネット上で、デザイン領域に東巴文字を導入することによって、東巴文字に対する若者の注目を高めた。しかし、麗江の納西族社会における、近年の東巴文字の状況については、まだほとんど研究が行われていない。筆者は1996年から2003年にかけて、長期間の現地調査を行った<sup>4)</sup>。これらの調査活動により、膨大なインタビュー資料や、政府各機関の政策資料や内部資料、現地撮影資料など数多くの資料を入手した。また土産物市場で使われた東巴文字について、言語的な分析の内容は雲南省社会科学院東巴文化研究所の研究者の協力でまとめることができた。

東巴文字は、本来、東巴祭司が宗教においてのみ用いる文字であった。しかも東巴祭司が司ってきた東巴教は、すでに一般の納西族の人々からは忘れ去られた過去の宗教慣行になりつつある。したがって、この文字を読むことができるのも、事実上極めて少数の人々に限られている。1990年代以来、活発化しはじめた少数民族の自存戦略や、さらに経済発展に結びつく新たな表現活動の出現という観点からみれば、現在、

麗江で行われている東巴文字および東巴文化の振興活動は、極めて重要な意味をもつものである。というのも、少数民族政策とくにその言語政策の一環としてみた場合、これらの伝承・復興活動は、中国における少数民族のあり方を考える上で、極めて特異かつ興味深い事例としてみなすことができるからである。そこで本稿では、このような東巴文字の伝承・復興活動に注目し、東巴文字の伝承にかかわる先行研究、新聞・雑誌論文・インタビューおよび現地調査による考察を研究素材とする。これらの資料により、麗江納西族と東巴文字の関係について、とくに東巴文字の伝承活動に注目しながら、その変遷を叙述し、変化の要因となった社会的背景を解明するのが、本稿の目的である。

まず伝統的に行われてきた東巴文字の伝承活動が、現在のような伝承活動へと変化した経緯を時代背景に即して概観する。さらに、現在、伝承を行なっている代表的な組織での伝承活動をとりあげ、それぞれの経緯・目的・方法・対象および現在までの成果について考察したい。

## 2 東巴文字衰退の過程

### 2.1 麗江における東巴教の衰退および伝統における東巴文字の伝承

まず納西族東巴教および東巴文字について、先行の研究をもとに概観しておきたい。中国では、東巴教は「原始的」多神教であり、万物有霊を信じる、納西族の民族の宗教であるとされる。中国において東巴教および東巴文字について一般の理解はほぼ次の要点に整理される。この宗教は、「原始宗教」に近く、統一した教会、固定した活動場所や専属の信徒などはまだ成立していない。すべての東巴教活動は、東巴と呼ばれる祭司を通じて行なわれる。東巴教を土台とした文化は、東巴教文化または東巴文化と呼ばれる。東巴文字は東巴祭司がもっぱら用い、東巴経典や宗教活動などを記録するために使われた文字である。東巴によって用いられるため、「東巴文字」と呼ばれている。この文字の最大の特徴は象形であるという点にあり、文字の形から書かれた意味を読み取ることができる。(楊福泉 1999: 445, 1998: 18; 郭大烈 1999: 1, 180; 楊世光 1999: 1; 李静生 2003: 172)

一方欧米でも、東巴が祭司活動をする過程や東巴文字に関してはほぼ同称のことが紹介されてきたが、東巴の治療活動や恋愛関係に陥った男女を自殺に誘導することなどにも関心が払われてきた。(Mackerras 1996: 30)。(図 2, 3, 4)

東巴文字の起源については、まだ論争が続いている。方(方国瑜 1995: 37-55)に



図2 東巴經典

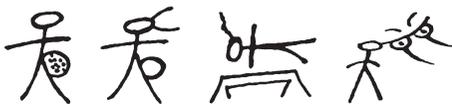


図4 東巴文字—満腹, 空腹, 寝, 看

よれば、東巴文字の起源はとても早いものであった可能性があり、いつ、誰によって作られたか明確にすることはできないと指摘されている。また、東巴教は11世紀ごろ、麗江で、統治階級に利用され<sup>5)</sup>、楊福泉によれば、納西族の最も重要な信仰となった。それに伴い、多くの東巴たちが神格化され、用いていた東巴文字も、特別な存在として畏敬の対象となっていたとみなされている(楊福泉 1999: 457)。

東巴教への信仰が高まると、東巴教の影響力を恐れた麗江納西族の統治者である土司一族は、徐々に東巴祭司と対立するようになった。彼らは、自分自身の地位を維持するため、東巴の社会的影響力を抑制しようと試みた<sup>6)</sup>。1253年、土司一族は中央政府の強い支持を得て、東巴祭司が当時有していた権力を剥奪する政策を実施した。その後、土司一族は支配階級の文化として漢族の文化の吸収に努めた。そこで、相対的に東巴文化は、権力者の手から離れた、庶民の宗教文化とみなされるようになった。

その後、清の時代に満漢文化との衝突によって、東巴文化は著しく衰退したとみられる。1723年、清政府は、少数民族地域における統治を強めるため、納西族のすべての住民に満漢文化を学ばせる「改土帰流」<sup>7)</sup>活動を行なった。先にも触れたように東巴は神格化される時期があったが、しかし、この「改土帰流」以降、「納西族社会は外来政治体制、文化および宗教から影響を受けることになり、(中略)東巴の社会的地位が日に日に衰退した。政治への参加は激減した」(楊福泉 1999: 451)。

前にも記述したように東巴教は厳密な組織性をもたない宗教であり、寺院や教会のような特定の場すらもない。東巴教における宗教活動は、人々の求めに応じて各家庭に東巴が訪れ、そこで行なわれていた。このことは、東巴教が極めて脆弱な基盤にあり、統治者などによる政治的抑圧に抗する組織力をもたない宗教であることを意味する。したがっていったん社会的な需要を失うと、その宗教的な影響力の衰退を食い留めることが極めて困難な状態に陥ることになる。

1949年の中華人民共和国の建国以前において、すでに麗江の納西文化は、主に漢文化の影響のもとに変容し、それに伴い東巴教や東巴文化は極めて衰退した状況にあ

り、麗江においても東巴教は影の薄い存在となった<sup>8)</sup>。東巴文字は、歴史上、一度も一般庶民に普及したことはなく、この当ても、一般の納西族にはほとんど認知されていなかったと考えられる。納西族の東巴文化は、納西族文化としての最も重要な地位を完全に失っていたといえる。庶民のあいだで東巴になる人のみが東巴文字の学習に励む程度であったとみなされる（方国瑜 1995: 1）。

このように東巴教への注目が薄れていくなかで、一方では西洋の探検家、旅行家、宣教師によって、東巴教と東巴文字は「再発見」<sup>9)</sup>され、限られた範囲内ではあるが、東巴文字や東巴文化への注目が集まった。この時期、国内外で、東巴文字を研究対象とする研究者は少なくなかった<sup>10)</sup>。それらの研究は現代に受け継がれ、重要な業績となっている。

このような時代の流れにおいて、東巴文字の学習を含め、東巴伝承の内容および状況についてはおそらく変化が生じてきた。以下、李国文（1998）、楊福泉（1999）、李静生（2003: 193）の研究を中心に19世紀末から20世紀初頭における東巴の社会におけるあり方を概観したい。

東巴は、普段は家で農業などに従事しており、他の農民たちと何ら変わりのない生活を送っており、社会的地位も相対的に低いものであった。村人から仕事を頼まれたときのみ、宗教活動を行なって、ささやかな謝礼を受け取るにすぎない。しかし、その謝礼のみで生活を維持することは不可能である。人々の需要がないときには、東巴は一般の労働者として生活を営んでいる。収入という面では、東巴は一般の労働者とはほとんど違いはなく、自らの労働によって生活を維持しているのである。

祭司としての役割を果たせるようになるためには、東巴文字をはじめ身体表現・絵画・手芸・占い・医術など多くのことを学ばなければならない。これらの知識や技術は、東巴教の伝承の一環として、東巴文字が祭司の後継者へ伝えられてきたのである。歴史的にみて、東巴になるのは東巴の家族に生まれた男子に限られている。東巴の家庭では、兄弟が何人いるかにかかわらず、子どもが5、6歳になると修業の勉強をさせる。一般に、親が息子に対して、上に示したような東巴教の宗教活動にかかわるさまざまな事柄を、主に祭祀の場に同席し、手伝わせることで伝承する。しかし知力や興味の違いもあり、最終的に東巴になれるかどうかは個人差がある。十分な知識を習得するだけでなく、祭祀活動の熟練度や宗教に対する意識の高さといった基準により、村の人々に認められた人だけが東巴となることができる。さらに広い範囲の人々に尊敬される「大東巴」となるためには、東巴教の聖地である白地を訪れて、修業する必要がある。東巴文字は東巴教知識を把握するための道具といえる。東巴は東巴経

典を読めるだけでなく、通常は携帯用の経典を自筆で書くことができる。ただし東巴文字の内容を理解するレベルについては、個人差がある。

## 2.2 建国後の東巴教の形骸化および経典解読の危機

1949年に中華人民共和国が建国されると、国策により宗教文化に対する風当たりが厳しくなった。東巴教の境遇も例外ではなく、中国政府は、東巴教が宗教であり封建社会の産物として扱った。すでに調査に先立つ、20世紀初期ごろ、20数年に渡って、東巴経典を収集し、研究を行っていたアメリカのJ・F・ロック (J. F. Rock)<sup>11)</sup>は、東巴文化および東巴経典について以下のように述べていたとされている。

今の政治制度のもとで、納西宗教(東巴教を指す—筆者)は徐々に絶滅していくであろう。宗教行為はすでに禁止されているか、もしくはまもなく禁止されてしまうことになるだろう。宗教の消亡に従って、彼らの宗教文化も消えていくはずである。近い将来、納西族の東巴経典は解読できない文献となり、いくら完成度の高い辞典を編成したとしても東巴経典は解明できない謎になるしかないであろう。(林 2002: 33-34)

彼の言及した通り、こうした政策のもとで、強固な組織をもたない東巴教は、その影響力を急速に失っていった。1962年、麗江県の人民委員会書記徐振康<sup>12)</sup>の指示で、県文化館研究員を中心に東巴経典翻訳組が結成され、「東巴文化遺産」を救う行動を実施した際にも、老東巴を見つけることは極めて困難であった。とくに1966年の文化大革命によって東巴教活動は全面的に禁止されると同時に、民間での東巴教活動はまったく姿を消すことになった。

一方、中華人民共和国建国以後、1957年、納西語のローマ字による表記法が設定され、社会生活においても漢語の実用性が高まると、一般庶民が東巴文字と接触する機会はさらに減少したと考えられる。東巴文化研究所の李静生<sup>13)</sup>研究員は筆者のインタビューに対して、次のように語っている。

1982年に雑誌『民族語文』に掲載された傅懋勳先生の論文と偶然出会った。この論文は納西東巴図画文字と象形文字の区別について論じたものであった。このとき東巴文字のことをはじめて知った。自民族が素晴らしい文字文化をもっていることに驚き、興味をもって研究を始めた。私は納西族であるが、我が民族がこのような伝統的な文字を有していることを知らなかった。

1980年代初期に、中国で大学に入学することができたのは、極めて少数の限られた人々であった。彼らですら東巴文字の存在を知らなかったのであるから、麗江地区に住む一般の人々は、東巴文字についてまったく無知であったとってよいだろう。

東巴文化は、辺鄙な村に住む東巴のあいだで、親から子へと細々と口伝されるほかない状況で、わずかながら維持されるほかないような状況であった。

雲南省社会科学院の李静生が筆者とのインタビュー（2002年）で語ったところでは、この時期、東巴知識を系統的に習得し、東巴になることを志す若者も皆無となり、すでに東巴として宗教活動を行なってきた人々も、身の安全のため東巴教に関する一切口をしなくなった。東巴たちがもつ知識は、将来的に利用価値のないものと考えられ、東巴自身も、ごく少数の東巴が自分の子どもに密かに教えられることを除いて、自らの知識を放棄しようと考えていた。東巴の数も急速に減少し、東巴経典もその時期に数多く失われた。文化大革命後期には、かつて東巴であった人々が、政府の会計を担ったということである。そして東巴文字が、人民公社の書類のなかに用いられていたことが確認されている（書き手が自分で読むために）。東巴のあいだで交わされた簡単なメモのなかでも、東巴文字が用いられていたが、周囲の人々はこれを平気で受けとっていたという。これは東巴文字の影響力の強さによるというよりも、東巴教に対する警戒感の低下や無関心を示す事例といえよう。このころには、麗江の多くの地域において納西族の宗教的感情はすべて失われていたと考えるのが妥当であろう。納西族の人々も東巴活動のない生活にだんだん慣れていった。中華人民共和国建国以降、東巴教からの反発は一度もなかったのである。

1949年から約30年間が経過すると、極めて少数の東巴が生き残ってはいたものの、彼らのなかにあっても、東巴教の儀式や、東巴文字などについての知識を、思い出せない者が多かった。東巴の家系に生まれ、現在東巴文化の研究をしている楊正文<sup>14)</sup>は「文化大革命が終了した年（1976年）に、元東巴の父と東巴文字についての話をしようとしたが、父は答えてはくれなかった」（楊正文1998:286）と述べている。生き残った東巴のなかには、かつて用いられていた東巴の知識を記憶している者もいたが、それらの知識や東巴文字などが、実際の宗教活動に用いられることはなかった。1970年代以降、東巴文字を含む東巴教文化は、納西族において、宗教的な意味を完全に失い、形骸化されたと考えることができる。雲南省社会科学院東巴文化研究所の李静生が筆者のインタビューに「1978年に至るまでの約30年間、最初、東巴文化は麗江納西族の日常生活から有形の文化として消滅しはじめ、最後には、人々の意識からも消えつつあった」と述べている。

### 3 東巴文字の研究の再開と保護政策の開始

#### 3.1 東巴文字研究の衰退と再開——文化大革命をはさんで

中華人民共和国 1949 年建国後、外国人の雲南省北部への出入りが禁止された。したがって欧米では、1980 年代まで、中国側の協力を得ず、1949 年までに入手した現地調査資料を頼りに、東巴經典の目録の整理を中心に、東巴文字の解釈や納西語文法の研究が行われていたに過ぎなかった。代表的な研究者は、アメリカの J. F. Rock (1972)、ドイツの K. L. Janert (1965) であった。一方、アジア近隣の日本の研究者は、1980 年まで、麗江をたずねることがなかったが、言語研究者の西田龍雄が 1960 年代、欧米、中国研究者の研究を手がかりとして、東巴文字を漢字と比較しながら、その構成法について研究を行い、『生きている象形文字』(1966) を出版した。そのほか、君島久子 (1978a, 1978b)、伊藤清司 (1979) が神話の研究、山田勝美 (1979) が文字の比較研究に東巴文字を取り入れたが、現地への調査は禁止されており、東巴の協力を得ずに、研究することは困難であったと考えられる。のちに、西田龍雄が限られた資料のもとでの研究の局限性を自らが認めていた<sup>15)</sup>。

一方、中国国内における東巴文化の研究は政府による国内の宗教状況把握のためのものが中心となった。

それらの研究は、50 年代から 60 年代にかけて行われた。まず挙げられるのは、雲南省民族民間文学麗江調査隊によって行なわれた調査である。同調査隊は、東巴経翻訳組を組織し、『納西族文学史』(初文)の編纂や、『創世紀』<sup>16)</sup>の資料収集や翻訳を行なった。また、1958 年から翌年にかけて東巴經典の整理が行なわれた。徐振康の指導のもと、麗江文化館において東巴經典 528 冊が整理され、そのうち 140 冊が漢語に翻訳された。石印版で調査関係者の内部資料として発刊されたうちの 22 冊は、未刊行ながら「以後の東巴文化研究における信頼できる資料を提供してくれた」(ト 1999: 170) という。さらに、中央民族学院によって麗江地域において、1,000 冊の東巴經典および関連する文物が収集され、国際的な表音記号を用いて記録された。これらの研究活動は、その後もより深められるはずであったが、当時の政治状況はそれを許さず、結局研究途上で中止されることとなった。

1976 年に文化大革命が終わり、中国は「一切正常化」をスローガンとして国家の再建に動き始めた。1978 年 12 月、中国政府は、北京で経済を中心とする改革・開放政策を作成し、翌年から実施することとした。これにあわせて、各領域の改革も急速

に進むことになった。こうした流れのなかにあつて、東巴文化に対しても、その意義を再評価する動きがみられるようになった。文化大革命終了後、納西族の東巴文化がもつ「納西族の古代文化」の意義が公式に認められたのは、1979年のことである。麗江県の政府官僚の和万宝<sup>17)</sup>は、率先して東巴文字や東巴文化の保護を始めた。和は、東巴文化保護の意図を次のように述べている。

東巴文字は老東巴しか読めない。老東巴の数は有限で、年を重ねていくごとにその数は減少し、大変な状況に直面することになる。したがって、私たち東巴文化研究室の当面の急務は、この状況に応急手当てを行なうことである。つまり、東巴典籍を全部、そのままのかたちで解釈し、興味のある研究者が今後自由に研究できるようにすることである。(和万宝 1999: 1)<sup>18)</sup>

彼の呼びかけにより、1979年に麗江で「東巴経翻訳小組」が設立された。老東巴のひとりである和雲彩は、研究者の経典翻訳において、有力な協力者となった。その後、東巴のあいだで、東巴文化、とりわけ東巴文字で書かれた東巴経典が歴史的に重要な意味をもつことが理解され始めた。かつて東巴文字の話を一切しようとしなかった楊正文の父親も、3年後、楊に教えるようになった(楊正文 1998: 286)という。

「東巴経翻訳小組」の設立は東巴文化研究の再開を意味した。1981年4月28日には、雲南省人民代表委員会から正式に「東巴文化研究室」の設立が認められ、麗江地区と雲南社会科学院の二重所管の形式で運営された。その後、「雲南社会科学院東巴文化研究室」と改称した。さらに和万宝が、「東巴経典を全部、そのままのかたちで解釈し、興味のある研究者が今後自由に研究できるようにすること」が当面の急務であるとされた。1991年には、「雲南社会科学院東巴文化研究所」と改称され、現在に至っている(図5)。雲南社会科学院東巴文化研究所の創立の目的は、東巴文化の保護と研究にある<sup>19)</sup>。このようにしてこの研究機関は名称を変えながら、政府の行政上の一部門としての位置を着実に高めていった。この事実からも、80年代以降急速に東巴文化の研究が国によって重視されてきたことが理解できる。

東巴文字の研究再開が、1979年という早いうちから可能になったのは、和万宝の力によるところが大きい。中国政府の明確な動きもなく、いまだ経済発展との関連も意識されていない状況にあったにもかかわらず、和と麗江県政府が東巴文字で書かれた東巴経典に着目したことは現在も高く評価されている<sup>20)</sup>。

研究再開後、雲南社会科学院東巴文化研究所の主たる活動は、東巴古籍の翻訳と整理であった。その仕事は、まず老東巴が一頁一頁、一文字一文字を解釈し、そして朗読し、次にそれを研究員が注音、対訳するかたちで成り立っている。こうして、研

究所は東巴經典の収集に力を入れ、東巴經典の収蔵・保護に努めていくことになった。

## 3.2 1990年代後半における文化伝承活動への動き

### —麗江東巴文化博物館の役割の拡大

改革・開放以降、「納西族の古代文化」保護という観点から、東巴經典の対訳が開始されたが、保護活動は文献にかかわるものに止まっていた。このような「古代文化」としての東巴文化に対する文献主義が、大きく転換されたのは1990年代に入ってからのことである。

周知のように1978年以後中国の改革・開放政策のもとで「経済建設」が全国、全党における中心的な政策課題となった。雲南省は「植物王国」「少数民族王国」として知られ、1992年になされた鄧小平の「南巡講話」後、雲南省政府は「観光業を發展させる考え」（関于大力發展旅游業的意見）を策定し、明確に観光業を重要な経済産業へと發展させることを打ち出した。このような情勢のもとに、1983年3月には、「対外開放県」と雲南省政府に規定された麗江では観光業を發展させる整備を進めることになった。1994年10月に、雲南省政府は「滇西北観光業規化会」（雲南省北西部地域の観光業における計画会議）を麗江で開催し、「観光業こそ経済發展の第一の手段」というスローガンを提起した。その会議は「麗江で地域主導産業に育つ観光を先導する戦略が推進され、麗江の観光業は「快車道」（發展のはやいこと）にのることになった」（欧2003:185）。その後の麗江政府の政策において、観光が最優先されるべきであることが確認された。

1994年は、麗江の観光發展の重要時期とされる。それと同期に、改革・開放政策以後における東巴文化研究の再開を唱導した和万宝は、1994年に東巴文化と社会主義精神文明の共通点を指摘し、「民族文化生態村」を開設することを提言した。彼は東巴教や東巴文化をただ保護するというだけでなく、文化の積極的な面を吸収することの意義を強調した。和万宝はその「民族文化生態村」に、ほぼ絶滅の危機にある「東巴」を養成するためのクラスを設置しようと考えた。そのクラスでは、現存する東巴のひとりが、東巴を志す若者たちに20冊の東巴經典と50曲の東巴歌および4～5種類の東巴儀式を教えることが構想されていた。

1995年、和万宝は出身地の麗江貴峰大来村で「大来民族文化生態村」を創立した。彼の東巴養成活動は観光経済との関係について具体的に明確化されることがなかったが、当時、東巴文化は観光業の重要な部分となり、東巴養成活動を構想した和万宝は東巴文化が未来に納西族と深くかかわっていくことを予感していただろう。しかしそ

の成果をみることなく、彼は翌1995年に世を去った。とはいえ、彼の文化伝承の構想は麗江東巴文化博物館<sup>21)</sup>に受け継がれ、1995年に、東巴に関する知識を学ぶための学校が、博物館のなかに設置された。これは、東巴文化の保護と伝承のための活動が、文献から現実へと進展しはじめたことを意味する。

その後、麗江東巴文化博物館で纳西学研究会が設立され、1998年にはその研究会によって、「全方位搶救東巴文化」(東巴文化の全面的救済)の実施方案がつくられた。そのなかには、次のようなことが記載されている。([全方位搶救東巴文化]1998)

- (1) 東巴文化を生きている人のあいだで伝承させるためには、東巴の養成が鍵を握っている。
- (2) 選択された村に東巴文化生態保護区を設置し、東巴文化を伝授し、祭典、祭生命神、祭署および婚葬の儀式を再開する。
- (3) 東巴文化の普及活動を進める。たとえば1千個の東巴文字を読めることを目的とする学習班をつくり、東巴文字を勉強することを奨励する。東巴文化を小学校教育に導入する。古城の路標などに、東巴文字を加える。麗江で東巴知識を競うテレビ番組を作成する。政府部門の人員に東巴知識の研修活動を求める、など。

その方案は麗江政府からの異議を受けることなく、1999年の中国麗江国際東巴文化芸術節において、麗江東巴博物館は麗江政府とならんで、主催者となった。また、納西族と東巴文化の保護をめぐる、2001年に政府が作成した麗江の東巴文化の保護にかかわる唯一の条例『雲南省麗江納西族自治州東巴文化保護条例』において、麗江東巴博物館の東巴文化保護職能の役割が強調されている<sup>22)</sup>ことから、1990年代末から2000年代初頭の時期、麗江東巴文化博物館の果たした役割の重要性を読みとることができる。麗江東巴博物館は東巴文化の保護、伝承の重要機関として注目された。纳西学研究会が作られた東巴文化の全面的救済方案は政府の施策ともなっていた(林2002:33-34)。

このなかで注意しておきたいのは、麗江東巴文化博物館館長が「政策(保護と継承を支持すること)は政府によって策定されるが、具体的な方法は私たちが考える」と述べている点である。東巴文化および東巴文字の保護や伝承については、麗江社会の各部門における考え方は一様なものとはならないまま、それぞれの目的・方法・内容で行なわれた。その代表的なものが、麗江東巴文化博物館、雲南省社会科学院東巴文化研究所、麗江東巴文化伝習院、麗江納西文化研習館、麗江教育局での伝承活動である。

以下では納西族文化研究の再開や、主に東巴祭司や文字文化の復活に関しての政府のかかわりについて考えてみたい。

## 4 1990年代半ば以降の麗江の東巴文字

### 4.1 東巴文字市場の形成—商品化する東巴文字

筆者が雲南省社会科学院東巴文化研究所で行なった数人の研究者のインタビューから、1940年代、東巴文字が東巴文字研究とかかわる知識階級を中心に宗教的な用途以外にも用いられるようになったことが明らかになった。たとえば研究者の李霖燦の年賀状、方国瑜の建国祝賀旗などに東巴文字が使われたことがよく知られている。そ

の後、東巴文字の姿はしばらく表面には現れなかったが、1978年以降、再びみられるようになってきたという。

研究面での東巴文字を除いて、1978年以降の東巴文字の実用状況について、筆者は研究者、デザイナー、東巴文字土産品の制作・販売に携ってきた人々、政府関係者へインタビューを実施し、さらに現地において土産物等の収集活動を行った。それらの調査活動をもとに、宗教的な目的以外で東巴文字の使用について、1978年以降の流れを概観したい。

まず最初にきっかけとなったのは、1983年に東巴文化研究に尽力してきた方国瑜が世を去った際、麗江文化館<sup>23)</sup>が東巴文字による対聯<sup>24)</sup>を葬儀に送ったことである。これ以後、麗江の和品正、蘭偉、周如成といった東巴文化研究者たちが、書道の一環として対聯を書くようになった(図6)。それらの作品は、毛筆の表現力によって東巴文字の新たな可能性を引き出すものであった。東巴文化研究所による東巴文字の書道作品は、麗江州政府の外交用、もしくは接待観光の土産物用として限定的に生産された。また、1984年に東巴文化研究所が考案したティーカップがあった(図7)。デザインは研究所の研究員である和品正が担当した。「永盛磁器メーカー」が生産を引き受けたが、実際は同じデザインで20数個が生産されたにすぎなかった<sup>25)</sup>。

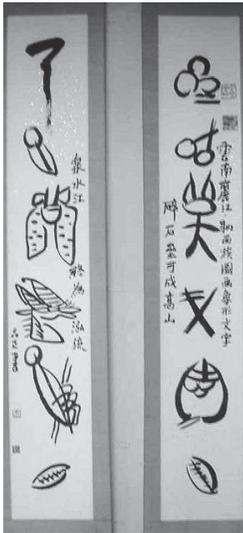


図6 対聯の作成



図7 ティーカップ

1990年には、雲南省作家筆会が麗江で開催され、主催者が「麗江県陶磁メーカー」製の東巴文字をあしらった筆立てを、会議の記念品として参会者に配布した。さらに同じころ、春聯がこの地域で一時的に流行し、旧正月の前に麗江地区科技委員会が東巴文字春聯をはじめ印刷し、政府機関の内部で使用した。1980年代から1990年代の前半において、東巴文字を書き込んだ工芸品は、麗江の文化特産物として文化界や政界などにおいて、おもに土産物として用いられていた。

上で述べたような、1980年代における東巴文字を用いた書や工芸品は記念品や土産物として外交などの場で贈呈されるものであり、商品として販売されることはなかった。ただひとつの例外は、1980年代末ごろに「国立麗江毛織メーカー」によって制作された毛織物製品である。これは同社が改革・開放の経済競争のなかで不況状態に陥った際、先述した和万宝がこのメーカーを救うために、商品に東巴文字をデザインとして用いることを薦めたのがきっかけであった。その後、雲南省社会科学院東巴文化研究所が、研究所の創始者である和万宝への敬意のしるしとして、東巴文字を織物のデザインに使用することを検討した。その結果、研究所の和品正とメーカーの合作により、1990年初頭にはじめて、東巴文字織物製品が完成した。しかし当初は、このような製品の存在はほとんど知られておらず、販売数も決して多くはなかった。しかし1992年、「中国上海92年工藝博覧会」へ4点の東巴文字織物製品が出品され、そこで「設計特別賞」を受賞したことによって注目が集まった。

1992年ごろからは、観光客をターゲットとして、麗江の土産品市場に木彫の東巴文字木盤（木製円盤）が現われた（図8）。この木盤は、1994年ごろまでには、麗江における定番土産品となり、納西族人が自ら店を出すようになった。このような活動は政府の主導によるものではなく、少数の納西族人による自発的な行為であった。

1990年代から、中国国内の研究者たちが、東巴文化のなかに納西族の伝統文化が多く含まれていることを盛んに指摘するようになった。1994年から、観光業の発展のために東巴文字の利用が有効であることが認められつつあったが、宗教の問題とかかわることから、東巴文字を政治的に扱うようなことは、中国政府もこの時点では想定していなかった。政府は伝統文化の伝承を中核とした文化保護の観点から、東巴文字を取り扱っていただけであった。この時期、東巴文字の利用を積極的に推し進めたのは麗江



図8 木製円盤

東巴文化博物館であった。同博物館は、東巴文字を納西族文化の象徴として扱うべきことを主張した。その結果、東巴文字を麗江県のシンボルとして土産品に積極的に使用することが検討されはじめた。

1999年の「中国'99昆明世界園芸博覧会」開催中、麗江地域の展示が昆明で高い評価を受けた。このことを受けて、同年10月に麗江東巴文化博物館が中心となって、麗江政府主催の「中国・麗江国際東巴文化芸術節」<sup>26)</sup>が開催された。この祭典は、観光業を発展させるための文化宣伝と文化研究の振興を目的として企画された。東巴文化の重要性とその経済生活との関連性が、政府によってはじめて麗江の全県民に対して伝えられたことになる。しかし、政府が経済振興のために東巴文化を取り上げることは伝統文化を破壊する恐れがあるとして、東巴文化研究者のなかには東巴文化の大衆の商業化に反対の態度を示すものもあった。

このような政府による催し物の効果もあり、1999年以降、多数の投資者が麗江に注目し、多くの資金を投入した。麗江政府も東巴文字以外に東巴儀式や東巴舞踊など、東巴文化全般が産業化することを、明確な政策方針として意識するようになった。とくに東巴文化のなかでも「優秀な部分」とされる東巴文字文化については、現代納西族社会の納西族の文化として定着させ、東巴文化を代表するシンボルとして扱おうとする方針を政府はとっている。無論、現時点では、納西族の人々すべてが、東巴文字を自民族の生活の一部として考えるまでには至っていない。しかし少なくとも、この文字が経済発展に利用できるという点については、多くの納西族の人々にも理解されるようになってきたのは事実である。東巴文字と市場経済とのかかわりは、麗江県の観光化が進むにつれてますます深まりつつある。東巴文化の象徴としての東巴文字が、さまざまな商品に刻印されている。麗江文化局長の李賜の「かつて東巴文字は、東巴によって使われ、記録を行なうという役割しかもたなかったが、現在では、ファッションや道具および装飾などの日常生活の領域にも広く使われるようになり、人々の需要を満足させながら、ますます発展していくであろう」<sup>27)</sup>ということばは、彼の東巴文化への期待を代表しているといえる。

## 4.2 観光産業における東巴文字

特筆すべきことは、2000年5月、雲南省が「建設民族文化大省」の政策を出して以降、麗江政府は東巴文化を観光業の「靈魂」(切り札)とみなし、東巴文化産業の発展が新たな経済発展の源となることをさらに強く主張するようになったことである。このとき麗江政府が重視したのが、納西族の人々が制作する木彫製品であった。

これらの木彫製品は、1990年代半ばから麗江においてとくに注目を浴びていた。というのも、観光業の発展に従い、麗江の人々にも経済的な余裕が生まれており、特に1996年の地震の直後、家の改修を行なう際に、伝統的な彫刻を施した木製の窓やドアの需要が大きく伸び始めたのである。当時、雲南省内において木彫民居の名産地である劍川の手工芸者が、数多く麗江で木彫店を経営していた。これらの木彫店は、民家の窓やドアに彫刻を施すだけでなく、ホテルやレストランに用いるための看板なども製造しはじめた。本来、このような店で販売される家具や看板などは地元住民のためのものであるが、多くの店が麗江古城に出店しているため、観光客がこれらの商品を買うこともあった。そこで麗江政府は、木盤を含む木彫東巴工芸品を麗江の民族民間芸術工芸品として、国内外のさまざまな催しへ推薦する方針をとり、納西族の木盤作品は、北京で開催された「第2届中国国際民族民間芸術展覧会」の「山花賞」や、浙江で開催された「首届国際民間手工芸品展覧会」の「銅獎」などを獲得した。それらの活動は麗江の木彫業に社会的な影響をもたらし、木彫製品は土産品のなかでも重要な役割を担うことになった。

現在のところ、東巴文字Tシャツ、東巴書道・絵画作品、東巴木彫、東巴蠟染め、東巴絨毯などの商品以外にも、この地域における特色のある文化が商品化されている。それらのうち主たるものは、以下のように5つに分類することができる。①東巴文化を観光客に展示することを主旨とする東巴文化展示の産業。代表的な企業は東巴宮、大研納西古楽宮、麗水金沙、玉水山寨、東巴拉走廊、聖靈東巴文化樂園などである。②東巴工芸美術の産業。この類の東巴文化とかかわるものは実に多く複雑であるが、個人の経営とは別に、一定の規模で企業経営する者も少なくない。代表的な企業には、麗江民族首飾、麗江民族鞋帽服装会社、麗江毛紡織品有限責任公司などがある。③影像音響メディアの産業で、現在203の売店が存在している。④食品包装の産業で、代表的な企業には東巴玉龍神酒、得一食品などがある。⑤広告宣伝の産業で、代表的な企業は高海拔書屋、麗江吉人文化伝播有限公司、麗江納西文化産業開発有限公司、緑雪斎などである。2002年ごろまでには、東巴文化産業企業は、麗江における主要な税源となっており、「東巴文化研究が深まり麗江の観光業が発展するに従って、東巴文化をひとつの特徴としての東巴文化が麗江の観光文化市場に進出している。そして、麗江の文化観光経済の原動力となりつつある」(『第2届國際東巴文化藝術節論文提要』2003:266)と、内外から高く評価されている。

### 4.3 古城に出現した東巴文字の実態

古城は麗江のかつての都である。その建築様式は、ペー（白）族の建築の特徴を吸収し、さらに多くの唐宋中原建築の特色をもつ。すでに漢化されたともいわれている（楊福 1999: 431）古城はかつて東巴文字があまり見られない場所であった<sup>28)</sup>。麗江の古城は貿易活動に用いる店舗が設けられており<sup>29)</sup>、観光客がよく尋ねる名所で、この地でも現在、東巴文字土産品の販売が活発におこなわれるようになった<sup>30)</sup>。（図 9, 10）

以下では古城に現れた東巴文字の実例を紹介したい<sup>31)</sup>。

まず古城の東巴文字が道路標識、看板および土産品に現れるケースである。

麗江のシンボルとして、1999 年年末から 2000 年に政府により、東巴文字入りの道路標識が以前の道路標識と入れ替わった。新しい道路標識が統一的に作成され古城の各道に設置されている。東巴文字、漢字、英文（ピンイン）の 3 種の文字表示で構成



図 9 土産市場となった古城

され、統一したデザインが施され、色や素材において「古い」雰囲気をかもし出している。これは木板に彫刻されたもので、彫り込まれた文字の部分が黒く塗装されている。この中のひとつを見ることにする。（図 11）この標識の道路名の部分には、漢字の「新華街」、東巴文字、ピンイン表記「xin hua jie」の 3 つの文字で表わされている。3 種の文字の大きさは統一されておらず、ラテン文字は一文字 8 センチ × 4 センチで「新」「華」「街」に対応するように、それぞれ 3 文字ずつ配置され、看板の一番下に書かれている。漢字は 8 センチ × 8 センチのサイズで一番上の位置に書かれている。漢字の「新華街」はゴシック体、ピンインの「xin hua jie」はローマン体が用いら



図 11 道路標識

れている。東巴文字は、経典に用いられた字体に比較的近い自由書写体で書かれており、一文字一文字の字体の大きさはとくに統一されていない。東巴文字の描線の太さは、漢字の5分の1ぐらいで、やや小さ目の文字で書かれており、漢字と英文のあいだに位置している。遠くから見れば、東巴文字はあまり目立たない存在である。一般の道路の標識として、一般の公衆が認識できる文字（漢字とピンイン）を大きく書く必要があるということが考慮されているようである。しかし近づいてみると、ほかの規則正しい印刷字体と比べてとても躍動感があり、豊かな生命力を感じさせるものとなっている。

店舗の看板にみられる東巴文字は、店主が観光客の目を引き止め、店の東巴文化的な雰囲気高めめるためと考えられる。また東巴文字の描き方に着目して見てゆくと、漢字の書道のような筆使いで東巴文字を用いているものを目にするがある。ここでは例として「一名齋」の看板を見ることにする（図12）。看板は高さ約40センチ長さ約80センチの木彫りのものである。看板の一番上部に印鑑のような押し印があり、下のスペースは漢字の行書書体で「一名齋」と書かれ、漢字の下に漢字と同じ書体（サイズは3分の1程度）で東巴文字、さらに1番下に英文（ピンイン）のアルファベットが書かれている。ピンインは細長いゴシック体が用いられ、漢字と東巴文字は「沙筆」という技法で墨のかすれている状態をつくり出している。その技法によって、スピード感と毛筆の印象を与えている。素朴で原始的な東巴文字のイメージが若干薄められ、漢族の文人の気質とその雰囲気を醸し出している。

土産品に東巴文字を入れているものも多く見られる。実際は東巴文字土産品として作られるものもあれば、既成商品に東巴文字を手書きで入れることも多いので、その種類は数え切れないほどあるといえる。新華街の土産品の統計によると、最もよく売られているのは手書き東巴文字Tシャツである。

まず、そのTシャツの制作過程を見てみたい。無地のTシャツをサイズの合う長方形の木板にはめ込み、Tシャツの布面を平らに広げる。布紡織品用の染料をいくつかの小さめの紙カップに入れておき、この平らな布面に、筆を用いて直接東巴文字を書き込んでいく。文字を書き終えたら、板に



図12 看板(一名齋)



図13 Tシャツの手描きおよび乾燥



図15 自由に想像された意味のない「東巴文字」

はめ込んだままのTシャツにドライヤーをかけ、風通しのいいところに置き、乾燥させる(図13, 14)。完全に乾いたら、2~3分間そのまま放置して形を安定させる。最後に、木板から抜き取って、手描き東巴文字Tシャツが完成する。文字図案の難易度により、1枚のTシャツは10分から30分ぐらいでつくられ、販売価格は、20元(300円)から70元(1,000円)程度となる。

次に、Tシャツのデザインについて見ていく。図柄には東巴文字をモチーフとしてつくられるデザインがある。そのようにして書かれた文字の図案は、東巴文字に似ているものではなく、まったく意味をもたない。(図15)はこのようなデザインの一例で、この場合はもとの文字自体が書き手の想像の産物であり、制作者A氏は「読むことや意味を類推することを考えていない」と語る。また、(図16)は東巴文字と他の模様と組み合わせてデザインがなされている例である。「ある意味をもつ東巴文字を基本にして、デザインをより面白くするために他の図案をいれている」と制作者B氏が述

べた。そして、最も多いものは、無地のTシャツに適当な意味を表わす東巴文字を書き入れた単純なデザインのTシャツである(図17)。制作者C氏は「よく描く文字を覚え、Tシャツに描く瞬間に色や大きさを考えるというような状況が一般的であ

る」という。

東巴文字 T シャツは販売現場で作られ、客の需要を応じて現場制作もよく行う。筆者が調査した結果、粗末な作りのものが多い。中高等教育を受けたデザイナーは少なく、デザインの知識も限られており、市場では同業者のデザインを模倣する行為が少なくない。

また、雲南省社会科学院東巴文化研究所の李静生氏、王世英氏の協力で、単に図案ではなく、文字としての意味をもつとみられるもの約 300 点を文字の信憑性について分析した結果、それらにも誤字や、誤用が存在していたことが判明した。



図 16 図案（少女と東巴文字）

## 5 民衆普及への伝承活動

### 5.1 麗江東巴文化博物館における東巴文化の民衆普及

先に述べたように、1995年2月、麗江東巴文化博物館は、麗江政府の支持を得て麗江納西東巴文化学校を設立した（図 18, 19）。この学校の目指すものについて、『香港文匯報』の記事では、次のように報道されている。



図 17 単純なデザイン

（東巴文化は）麗江のひとつのブランドとして、56の民族文化のなかでも抜きん出た輝きを有することとなった。しかしそれと同時に、人々はこれを「文化」としてみなすようになり、学術化と神秘化への道を辿ることとなった。つまり東巴文化は、限られた東巴と学者しか知らないものとなり、日に日に神秘的になり、民衆から遠ざかることとなったのである。東巴文化は民衆と離れてしまえば、存在する価値をなくしてしまう。（東巴文化の）存在する理由がないところに、その伝承や発展などは考えられない。東巴文化は、民間へ返す以外にその存在する場所はない。（和向紅 2001: 10・9: B23）。

つまり、「東巴文化源于民間，還于民間」（「麗江納西東巴文化学校東巴文化伝承骨干培訓班簡況 2003」）（民間は東巴文化の源であるという立場から、その文化を民間へ



図18 麗江納西東巴文化学校

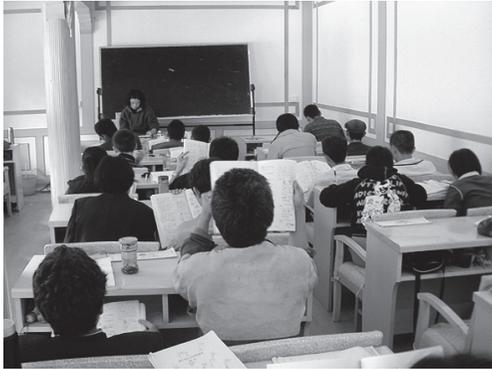


図19 東巴文化学校の授業風景

帰すこと。以下、「文化返民」活動と称する)こそが、麗江納西東巴文化学校設立の目的であった。麗江納西東巴文化学校における伝承活動は「文化返民」の重要な手段のひとつとみなされており、東巴文化の伝承を専門学校のかたちで行なうことを使命としている。

この学校設立において主導的役割を果たした、麗江博物館長と麗江納西東巴文化学校長を兼任する李錫は、「納西族はこれまで東巴文字に対して積極的なかわりをもつことはなかったが、その知識については潜在的に受け継いできている」と語っている(2002年の筆者のインタビュー)。また、そこでこの東巴文字や文化を伝えていくことは、納西族が自民族のアイデンティティーを確立することに寄与するものと見解をもっていることを明らかにした(2003年のインタビュー)。

麗江東巴文化博物館の李錫は、納西族が世界民族の中で東巴文字を持つという特殊性を失わないことが重要であり、さらに、「文字は兵器の如し」<sup>32)</sup>との喩えを引用し、民族文化にとって最も認識しやすく有力な東巴文字の特徴を強調した。この観点から東巴文字を一つの教科として学校の伝承課程において採用されることを非常に重視している。また、観光産業の発展においても、東巴文字は重要な武器とみなされている。麗江東巴文化博物館における伝承活動は、その武器である東巴文字と宗教活動をすべての民衆に普及させることにつながるというのである。「文化返民」活動は、東巴文化を麗江の現在の社会に普及させるという意味をもつ。これによって、麗江の納西族全員が文化を継承することができるだけでなく、文化産業への利用も可能となり、文化の発展にも貢献できるであろうというのが、麗江東巴文化博物館館長をはじめとす

る「文化返民」活動推進者たちの構想であった。したがって、東巴祭司と関わることから「東巴文字」と呼ばれている文字は、発展的にみればより広範な概念である「納西象形文字」と呼ぶほうがもっと相応しいと主張している。

学校設立後も、不定期ではあるが学習班による勉強活動が行なわれている。学校の設立とその後の活動が県政府に認められ、2001年までに県政府は19万円の資金を東巴文化の保護と伝承に費やすこととなった。学校の経費は、県政府からの割当金（不定期）や東巴文化博物館の売店の売上金によってまかなわれている。東巴文化博物館の麗江納西東巴文化学校は修学期間が短く（1～3箇月）、納西族に東巴の知識を普及させることに重点が置かれている。学校は不定期に全県に向けて学生を募集し、東巴文化に興味がある人なら誰でも申し込むことができる（「保護東巴文化的戦斗已經打响——東巴文化体表性伝承点簡介」2003: 3）。学校は東巴文化教材も編集しており<sup>33)</sup>、2002年4月には活動の様子が新聞にも採り上げられた。その記事の内容は以下のようであった。

4月24日（2002年）、麗江納西族自治県において、34名の納西族農民が麗江納西東巴文化学校で行なわれた東巴文化伝承中核班に参加した。それらの人たちは、県内24の郷から選ばれ、1箇月の訓練を経たのち、各地に戻り、東巴文化を伝承する。これは、麗江県において東巴文化の保護・伝承を強化し、東巴文化を民間に浸透させるための措置である。（「東巴文化伝人多」2002(3): 18）

麗江東巴文化博物館「麗江納西東巴文化学校東巴文化伝承骨干培訓班簡況2003」によれば、2003年11月までに、10期の入学募集があり、24の鎮（都市）からの350人の修了生が出たとされている。ここでは資料の関係から、第7期生と第9期生を例に、その就学状況や卒業後の進路などについて簡単に述べてみたい。

第7期の期間は2002年4月から5月の1箇月間で、形態は全日制授業制度（8時から17時30分）であった。設置された課程は、納西象形文字、東巴經典、東巴儀式、東巴工芸、東巴舞踊、納西族史、東巴文化概論の7つであり、またそれ以外の講座を不定期に開講する。専任教員は4名で、その他に老東巴や学者などが非常勤講師として訪れることもある。学生は33名で全員納西族である。麗江の13の郷から選ばれ、年齢は15歳から60歳までと多様である。学歴においても中学卒の農民が多いが、修士の学位をもつ人から小学教育しか受けていない人までが共に学んでいる。東巴文化に興味もつ人が、かなり広範囲に及んでいることがうかがわれる。学生は毎日10元の手当をもらうことができる。

第9期生の場合は、履修課程が7期生と若干異なり、東巴文字の書き方、東巴古籍

の読解、祭祀儀式、東巴工芸、東巴舞踊の5つに分かれていた。学生の指導に東巴（必ずしも全員が老東巴であるとは限らない）や東巴文化博物館の研究員だけでなく、第1期生の卒業生2人も参加していた。また7期と比較して大きく違う点は、月300元の生活費が一括で渡されていたことがあげられる。いずれの場合においても、たとえば、かつて子どもを生む際に行なわれていたような宗教的儀式は教えられていない。

学生たちは、麗江納西東巴文化学校への研修を自ら申し込んだ人のなかから選ばれたという。学生たちは「東巴文化を一応知っており、勉強したいから申し込んだ」という人がいる一方で、「よくは知らないが東巴文化がおもしろいから」とか「手当ももらえ、麗江の中心地で1箇月過ごすことができるから」という理由で参加者となった村人もいた。「東巴文化を勉強することはおもしろいが、自分ではよくはわかっていない」、「将来この知識をどう使うかはまったく考えていない」と考えている参加者も少なくなかった（2002年、在学中の学生へのインタビューより）。

東巴文化博物館側は、課程を終えた学生たちが地元にもどって東巴文化の伝承に努め、東巴となっていく人が現われることを希望している。しかし修了生の状況についての統計資料は、いまのところ存在しない。学生が入学する際に把握している東巴文化に関する知識にもかなりの差があり、1～3箇月の勉強を終えたのち、地元に戻って修行活動が続けて村の東巴になる学生もいれば、そのまま元の農民にもどる学生もいる。麗江東巴文化博物館が実施した措置により、民間の14の村で、伝統的な婚葬習慣を守って東巴を招き東巴儀式を行なう人に対して、500円の経済的な褒賞を与えることが定められている。また観光産業界に入って自らの東巴文化にかかわる知識を利用している学生もいるが、東巴文化とはまったく関係のない仕事をしている者も多いと担任教師は述べている（2003年、筆者の教員に対するインタビューより）。

1995年から2002年の8月までのあいだに9期の養成が行なわれたが、7、8、9の3期が2002年4月以降の6箇月に集中している。ここにも、政府側の東巴文化伝承の動きが、活発化していることが読み取れる。東巴文化の教育の必要性は急激な高まりをみせつつある。

## 5.2 民間における東巴文化伝承活動

麗江では、一般の民衆へ東巴文化の伝承に力を注いでいる個人や民間の組織が存在している。ここでは代表的な2箇所の取り組みを紹介しておきたい。まずひとつは、東巴文化研究者の郭大烈<sup>34)</sup>とその夫人の黄琳娜が退職後の2000年5月に創立した、麗江東巴文化伝習院の取り組みである（図20）。この組織は、現在「民間公益性文化

組織」とみなされている(『第2届國際東巴文化芸術節論文提要』2003: 260)。納西古樂や東巴文化の伝習を目的として、民間学術交流活動を行っている。希望があれば、一般の人もここで講習などを受けることが可能である。

もうひとつは、麗江地区委員会宣伝部の承認を得て、和力民<sup>35)</sup>が1998年8月に設立した「麗江納西



図20 東巴文化伝習院

文化研習館」での取り組みである。この研習館は、麗江金山郷貴峰行政村三元自然村に位置し、東巴儀式の踊りなどを中心に東巴知識の伝承活動を行なっている。講師は設立者の和力民が担当し、東巴文化に興味がある人であれば、無料で毎週金曜日に実施される授業を受けることができる(2001年には16名、2003年からは10名が参加し、あわせて26名が受講者となっている)。この研習館の学生たちは、1999年中国麗江國際東巴芸術節において東巴舞踊を演じた。現在一般学生は、14種の祭祀舞踊ができ、7つの祭祀が行なえ、5冊の東巴經書を読むことができる。さらに研習館では、10種の祭祀が、指導可能な知識とその祭祀にかかわる經典の暗誦、および東巴絵画についても理解を深めるよう指導している<sup>36)</sup>。研習館では、月に2回程度の「女性東巴文化学習班」という女性専用のクラスもでき、「創造的な学習班」(第2届國際東巴文化芸術節組委會2003b)と評価されている。このクラスは、伝統的に男性のものであった東巴文化を女性が学ぶことができるという意味で、画期的な意味をもつといえよう。学生たちのなかには、この研習館で学んだ知識を利用して、東巴文字にかかわる土産物などを扱う店を開業する者もいる。

## 6 東巴祭司の養成活動

### 6.1 東巴教祭司養成への経緯——断絶した東巴知識

伝統的に東巴文化は、東巴祭司を通して可視的な行為として現われるものである。つまり東巴祭司の宗教活動がなければ、東巴文化は社会のなかに実体として存在することができないのである。中華人民共和国建国以前、東巴が最も多かったときには、約1,000人が存在していた。しかし1983年に開催された東巴談話会に出席した東巴

は61人で、同年4月の統計においても納西族地区に60歳から80歳の東巴は60余名しかいないとされている。先に述べたように(III-1)、1980年代はじめ、東巴文字で書かれた東巴經典の対訳が和雲彩らにより進められたが、これがきっかけとなり、研究領域において東巴に対する評価が高まった(郭大烈・和志武1999: 38-54)。このころから東巴經典は納西族の百科事典であり、東巴は納西族の知恵者とみなされ、1980年代末には、納西族の知恵である東巴文化を人々へ伝承することが東巴研究の研究者たちのあいだで求められるようになった。このような研究領域における要望が、先に述べたような東巴の養成活動にもつながっていったといえる。

雲南省社会科学院東巴文化研究所の研究者たちは、東巴が活着しているうちに彼らの知識を何らかのかたちで保存することに力を注いだ。1990年代後半になると、伝統的な東巴文化を受け継ぐ東巴は10人に満たないという状況となってしまっていたからである。

すでにIIにおいて、伝統社会における東巴祭司のあり方、および新政権成立後の衰退の始まりについては概観したが、その後も、東巴教に対する需要はつい最近まで減少の一途をたどっていた。それだけでなく社会的地位が低く、不安定な基盤のうえに存在していた東巴の数が減少するのは当然のことであった。80年代には計画的に東巴の養成をしない限り、東巴文化の継承者である東巴自身が絶滅しかねない状況であった。先にもふれたが、まず研究上の要求から、ようやく東巴の存在意義が見直され、東巴の養成と東巴教活動の普及が東巴文化を伝承するうえで不可欠であると考えられるようになったといえる。そこでまず、雲南省社会科学院東巴文化研究所が、東巴の養成に力を入れ、すでに、東巴文化についての研究を20年以上にわたって実施してきた。研究者は、東巴文化が麗江の納西族の生活とかけ離れてしまっていることも十分認識しており、その伝統文化を保護することに強い責任感を抱いてきた。観光化の進展に伴い東巴文化が経済発展に利用されつつあるなかで、伝統にもとづく東巴教文化の保護はむしろ困難になっている側面もある。このような状況に対して、研究所の所長の趙世紅は、次のように述べている。

東巴文化は民間の民族文化です。東巴文化の保護と救済は、地域に密着したかたちで行なわれなければならない、現地の民族と離れることも、文化の生態から離れることもできません。東巴文化は、民間において救済します。この何年かのあいだ、私たちは東巴文化を伝承するため、多くの仕事をしてきましたが、これらの仕事の重点は紙の上や文人の家や舞台の上での救済活動でした。民間における救済活動はまだ十分に行なわれていません。当然のことながら、社会が発展し、時代は移り変わり、人々の思想も変化しています。私た

ちは、現代社会に伝統文化の全面的な回復を急速に達成することはできませんが、現実の状況をよく考慮し、内容と段階と重点をわけて保護と救済を行なってゆくべきでしょう(趙世紅 2002b)。

40年ものあいだ、東巴教による宗教生活が行なわれなかったため、民間の宗教感情が失われ、環境も東巴教が盛んだったころとは大きく変化している。宗教的な意味での東巴文化が麗江の一般社会に普及することは現在のところ不可能であることを認識しながらも、研究所では、東巴後継者が絶滅することを憂慮し、街と離れた辺鄙な村で東巴文化を復興できるかどうかについて検討を行なった。2001年、東巴文化研究所はアメリカ大自然保護協会および福特基金会からの助成金を得たことをきっかけとして、東巴養成に力を入れはじめた。次節では雲南省社会科学院東巴文化研究所の活動を詳しくみることにする。

## 6.2 雲南省社会科学院東巴文化研究所における東巴養成

麗江東巴文化博物館の麗江納西東巴文化学校の「文化返民」方針とは違い、雲南省社会科学院東巴文化研究所では、創立者である和万宝の「東巴文化を救う」という方針をまもり、東巴養成活動の計画を立てられた。この計画では、特定の場所から人材を選び、2000年9月から2002年9月まで東巴の養成を行なうことが計画された。さらに東巴養成後、その場所へもどし、修業および宗教祭祀などに専念させることを目指した。ここでは、筆者が実際に視察を行った際に入手した資料をもとに、東巴文化研究所における東巴養成課程の状況について概観してみる<sup>37)</sup>。

まず研究所は、民間でも東巴宗教活動を行なうことが可能と推測される場所から養成対象を選ぶことにした。場所の選択については、麗江の街と離れていること、交通の便がよいことなどが重要であると考えられた。つまり麗江の中心部と距離が離れており、交通なども不便であればあるほど、伝統的思想がまだ残っているとみなされたのである。もうひとつの重要な点は、その地域において東巴の伝統が存在していることであった。これらの条件から、たとえば曙明という地域が候補地となった。曙明には建国以前、有名な東巴が、数多く住んでいたからである。その地域の東巴である和順から1980年代に教えを受けていたBとCの2人が新しい東巴の後継者候補として選ばれた。同様の方法で、8名の納西族人が伝人として選ばれた。筆者が現地調査を行なった2002年8月には、7名が在学中であった(ひとはり事故のため不参加)。

東巴養成活動は、麗江中心部から少し離れた雲南省社会科学院東巴文化研究所内で実施された。正式に養成活動が開始される前に、2001年、「雲南省社会科学院東巴文

化研究所東巴文化伝人管理条例」が策定された。「条例」は9条から成り、そのなかには、第5条「学生に用事があり、外出するときは休暇をとること」、第6条「学生は学習に専念しなければならず、それ以外の活動や外部の人を施設内に宿泊させることを禁止する」、第7条「学生は、夜間の外出、娯楽施設への入場、外泊をしてはならない」といったことが定められていた。これは、できるだけ麗江のような文明社会と接することを避けることが意図された結果である。こうして、極めて厳しい規則のもとで日常生活を送ることが義務づけられた。教授方法については、なるべく伝統に近い方法がとられ、東巴經典の暗誦や筆記においても、カセットテープのような現代的な機器を用いることは避けられていた。東巴經典や儀式から東巴の思想に至るまでの詳細な指導を行なうだけでなく、故郷へもどって東巴儀式を試す実地訓練も行なわれた。指導者は研究員および研究所内の老東巴である。のちに老東巴が亡くなり、2002年4月からは研究所の李静生と王世英などの研究者のみが指導を続けた。7人は東巴知識の学習歴も異なり、漢文化の学習歴や宗教に対する意識および年齢なども違うため、把握している東巴知識にはかなり個人差がある（表）。

雲南省社会科学院東巴文化研究所の東巴養成は、学生に東巴文化の知識を教える一方で、学生の宗教観念や宗教感情を重視したことに最大の特徴がある。東巴の知識をもつ研究者が東巴になれない原因もここにある。筆者が現地調査に訪れた時点においては、東巴知識の多少や宗教感情などの複雑な理由で7人全員が東巴と認められていたわけではなかった。新聞記事ではそのうちの2人が東巴となったとされている（張文凌2003）が、B氏以外は名前が挙げられていない。先にも述べたように、本来、東巴になったかどうかについての判定は民衆の承認によるものである。ここで養成された東巴たちは、そのような承認が可能な環境にいない。彼らは宗教感情をもつ民衆がほとんど存在しない環境で、現代の文化教育を受けず、文化保護のために東巴知識

名前	生年	出身	入所年月	学歴	民族	読經典	東巴舞	祭祀儀式	製面偶
A氏	1961	曙明	2000.9	小学初級	納西	50種	0種	13種	8種
B氏	1980	曙明	2000.9	小学初級	納西	60種	30種	10種	10種
C氏	1978	曙明	2000.9	小学初級	納西	50種	30種	7種	10種
D氏	1986	塔城	2000.10	中学校	納西	14種	4種	0種	0種
E氏	1986	塔城	2001.3	中学校	納西	60種	4種	0種	0種
F氏	1976	鳴音	2001.3	中学校	納西	7種	2種	0種	4種
G氏	1985	下東河	2001.4	中学校	納西	2種	0種	0種	0種

表 雲南省社会科学院東巴文化研究所の養成中の東巴（2002年）<sup>38)</sup>

を勉強し、東巴宗教の内容を継承して自ら東巴教の復興をめざしている。

現在はほとんどの老東巴が世を去り、宗教活動をしていた真の意味での老東巴は、麗江では10名あまりしかいない。彼らも東巴知識を長期間用いていなかったため、解読が可能な東巴經典は限られている。雲南省社会科学院の楊福泉は「經典を読める東巴がもういないのではないかと私も心配している」（張文凌 2003）と述べていた。東巴文化研究所が1979年から20余年にわたって実施した東巴經典の翻訳に協力した、当時最も優秀な老東巴10名のうち9名がすでにこの世を去った（2004年現在）。彼らは中国建国以前における各村の大東巴であった。1980年までの宗教活動の停止によって、当初においてさえ彼らも過去の東巴教知識を思い出せない部分もあった。しかし本来優秀な東巴10人が一堂に会して經典の翻訳に取り組んだことにより、彼らの東巴知識の記憶は回復していった。彼らの東巴知識は研究所に蓄積され、研究員たちの知識を高めるのに役立った。この東巴教翻訳活動がまだ行なわれていた1990年代において養成課程を受講していたB氏は、現在考えられる最もよい環境において教育を受けた人であるといえる。王世英、李靜生、趙世紅は、B氏が現在、麗江において最も東巴知識の豊かな東巴のひとりであると評価した。しかし、彼のような人材は他の東巴養成機関からはまだ出てきておらず、研究所の東巴養成がいかに水準の高いものであったかを物語っている。

先にも述べたように、雲南社会科学院東巴文化研究所の東巴養成計画では、研究所内における2年の修業ののち、辺鄙な地方で修業と宗教祭祀に専念して、宗教活動に従事することが原則となっている。そして7名の生徒も、その役割を自覚していた（筆者のインタビューによる）。しかし2002年9月、学習が修了した直後に、麗江の観光市場の発展にともない、東巴文化知識がある人物、とくに東巴と呼べる人材の需要が増えたため、この7人全員は観光市場において一役を担うこととなった<sup>39)</sup>。前述のB氏は、現在東巴の代表として国際的にも活躍している<sup>40)</sup>。彼らの知識はまだまだ不十分であるが、今後の国際東巴文化交流や学術研究にこのような東巴の存在は欠かせることができない、と中国の研究者はみている（楊福泉 2003）。

雲南省社会科学院東巴文化研究所において行なわれた東巴養成活動は、東巴文化の伝統的な意味での東巴知識の継承に一定の成果をあげた。東巴は現在の社会において新たな役割——伝統文化の宣伝、研究および交流において、また経済の領域においても重要な役割を担うようになったことを認めることができる。研究所の東巴養成活動も一段落し、将来、村々で、地域ごとに養成活動を行なうことが検討されている。しかし、経済発展や、交通整備など進むにつれ、「辺鄙地域」といえる場所が急速に減

少し、伝統的な意味での東巴教活動を復興することは、不可能になりつつある。今後は、これまでとは異なるかたちをとることになっていくと考えられる。(図 21, 22, 23)



図 21 筆者と会話する B 氏

## 7 学校教育に導入された文字伝承活動

### 7.1 学校教育導入に際して行われた議論 —東巴文字と納西語とのかかわり

ここまでの論述で明らかなように、納西族と東巴文字との関係は、通常考えられるような、民族と文字との関係とは大きく異なるものである。さらに改革開放政策以後における東巴文字普及も、従来の中国の対少数民族言語政策に関し庄司（1987）によって指摘されたような、中国少数民族に対する「文字創製」とは基本的に異なる道筋で進められている。すなわち経済的な目的や観光業の普及という観点から進められた「イメージ戦略」という側面が強くあり、近代国家としての識字率の向上や少数民族の国家への帰属意識の操作が直接の目的となっている訳ではなかったことが推測される。筆者はむしろ、「民族自決」のような理念的なものが先行するのではない文化伝承活動が、文化と民族の関係を考察する際、新たな視座を与えるのではないかと考えているが、この点については、VIII の考察の部分で改めて述べたい。

いずれにせよ、東巴文字がこの地域および納西族のイメージを高め、経済的な効果を生み出すことが明らかとなってきたことにより、その伝承活動をより公的なかたちで実施しようとする動きが出てくることは、ごく自然な流れといえるであろう。実際、麗江東巴文化博物館の館長は筆者とのインタビューにおいて、東巴文字の普及と教育に関して次のように述べている。

東巴文字は伝統文化であり、伝統は過去、現在、将来に必ず現われるはずです。過去 10 年、東巴文化は東巴教という宗教の範囲内で扱われてきましたが、私は、東巴文化および東巴

文字は一般の納西族にとってはまだ民族的な意味をもっていると考え、「東巴文化の伝承を民間化」することを唱導しました。東巴文化は納西族の伝統文化であり、宗教性をもつとともに、民族性をより強くもっていると感じます。1995年に東巴文化学校を設立し、1999年には東巴文化伝習院もできて、現在麗江では東巴文化を学んでいる人は400人を超えています。現在私は東巴文字の指導を麗江の一般教育に導入することを試みています。麗江の教育部門の協力もあって、小学校、中学校および昆明の民族学院でも、実験的なグループが形成されました。またこのような試みを幼稚園にも導入しようと考えています。

若干注意を要するのは、「東巴文化は納西族の伝統文化」という館長のコメントが、多分に「イメージ戦略」的な意味合いを含んでいるという点である。これまで述べてきたことからわかるように、一般の納西族にとって東巴文化は宗教文化であり、彼らの文化（何を文化と呼ぶかについては、厳密な議論が必要であるが）の一部分に過ぎない。しかし納西族のような少数民族においては、民族を代表するような遺産としての「文化」を持っているケースは、あまり多いとはいえない。東巴文字のような、明確な文化的表徴は、民族のシンボルとして機能しやすいのである。東巴文字を中心とする東巴文化によって、納西族の文化を代表させることにより、この少数民族のイメージをより強固なものにしようとする意図が見てとれる。

このような事情を背景として1990年代末から、麗江では納西族が東巴文化や東巴文字をある程度把握するべきであるという考え方が芽生えつつあった。このような動きに対して、東巴文化博物館や麗江文化局といった公的機関を中心に賛成の声があがっている。しかし研究者を中心として、反対の声も多く存在する。民族学者費孝通は、雲南省を訪ねた際、次のように述べている。

納西族の象形文字は、漢族の甲骨文より古い文字であり、その使用範囲も大変狭くなってきているのかかわらず、そうした文字を学生に勉強させることに、実際にはどのような意味があるのだろうか。また学生の負担は重すぎないだろうか。もちろん私たちが研究の専門家を育てるように、東巴文字を含めた東巴文化も研究してほしい。しかしそれを普遍的に押し広めることは非現実的である（「著名学者費孝通談納西文化」2002, 5, 27）。

前述したように、本来、納西族は漢族の文化を積極的に導入してきたことで知られる民族であり、そのことで自らの地位や文明を高めてきたという歴史的な経緯がある。また現代においても、漢語の習得が中国社会において高い地位を得るために重要であるということは、変わらぬ事実である。したがって一般の民衆にとっては、納西語や東巴文字の習得は負担こそあれ、大きなメリットが感じられないとしても不思議はない。とくに東巴文字の場合、それを知ることが納西語の習得に有利になる訳ではないため、状況はより複雑といえよう。

## 7.2 民族言語危機および東巴文字伝承の結び付き

賛成と反対が入り乱れる状況ではあったが、学校教育への東巴文化および東巴文字の導入は、社会的にも徐々に支持されつつあるように見受けられる。しかしここで問題となったのは、東巴文字教育を行なうためには納西語を話せることが前提となっていなければならないという点である。麗江の納西族の人々にとって、納西語は日常語ではなくなりつつあったからである。中華人民共和国建国以来、麗江では社会生活において漢語が中心となり、納西族家庭においても、大多数の保護者が、納西語ではなく漢語の能力を重視するようになってきている。筆者は、一般家庭の、子を持つ親へのインタビューを行なったが、学校教育では漢語を使用することになっており、漢語の能力は子どもの将来の進学にかかわるのに対し、納西語は子どもの将来の社会進出に役がたたないというのが、一般の保護者の考えである。逆に子どもが納西語でしゃべることに慣れてしまうと、将来の漢語能力に悪影響を及ぼす心配があるという見方すらある。

2003年中国麗江第2届国際東巴文化芸術節学術研討会において、麗江教育局の楊一紅は納西族の言語使用について以下のように言及した。それによれば、麗江教育局の1990年代の調査の結果、親はいうまでもなく、祖父や祖母でさえ子どもや孫に漢語の使用を強制している家庭が多いという。また1997年以降は、観光客や貿易関係者などの外来人口が増え、麗江では納西語を用いることができる機会がさらに減少した。人の出入りが激しくなり、漢族が急増するとともに、納西語を話すことができる環境が失われつつある（楊一紅 2003）。1998年に麗江教育局が調査した結果、大研鎮（古城）を中心として、そこに近ければ近いほど納西語を話すことができる人が少なく、年齢で見ると若ければ若いほど納西語ができない」（麗江市古城区教育局 2003）。という状況が浮かびあがってきた<sup>41)</sup>。

東巴文字教育を学校へ導入するかをめぐっての議論に、納西族の民族としての成立と深くかかわる納西語の危機的問題の深刻さが浮かんできた。東巴文字教育が学校教育に採用されるべきかどうか先に先立ち、納西族言語教育の必要性についてはすべてが同意するところであったのである。そこでまず麗江教育局は、1998年9月に興仁小学校で納西語の教育課程への導入を試みた<sup>42)</sup>。この際、教育に用いられた表記法は1980年代から試行されているアルファベットによるものである。翌年、黄山小学校が2つ目の実験学校として、学校教育課程での納西語の教育をはじめた。その後2003年までに、教育局の決定により、納西語教育を実施する学校は13校にまで増加した（麗江

市古城区教育局納西文化傳承方案 2003)。

納西語の教育の再開により、ようやく東巴文字教育を実施する環境が整えられた。さらに教育局は、本格的に東巴文化および東巴文字の小学校教育への導入の準備を進めていった。教育局は、麗江東巴文化伝習院をその準備作業を行なう機関に指定し、学校での東巴文字に関する授業の計画や教師の派遣計画の作成を依頼した。講師は麗江東巴文化博物館や雲南省社会科学院東巴文化研究所の東巴文化研究員などが非常勤で担当することとなった。

そしてついに 1999 年 4 月、麗江黄山小学校において東巴文化授業が、少数のクラスにはあるが導入されることとなった。これらのクラスは、東巴文化特色班と呼ばれている。2002 年 9 月には、興仁小学校が対象校に加えられ、さらに中学校においても玉龍県第一中学校で東巴文化授業が実施されたのである。これらの学校は、教育局の東巴文化伝承基地として重視された。授業は試験的に行なわれているものであり、年々変更が加えられている。ある学校では、課程を 4 名の教師が担当し、授業科目は東巴文（文字）、東巴文化常識、東巴音楽、東巴舞踊の 4 つがある。授業期間は 17 週間に 34 レッスンとなっている。玉龍県第一中学校の「東巴文化特色班」は小学校（黄山小学校）から中学校へ進学したクラスで、東巴文化の継続的な学習が行なわれていることになる。担当教諭は 6 名で、6 つの東巴文化課程（東巴文、東巴文学、東巴古楽、東巴舞踊、納西族歴史文化知識、民間文芸紹介）がある。2003 年 9 月 1 日から 12 月末まで 18 週間に 32 レッスンが実施された。授業はまず東巴知識の概況が紹介され、さらに東巴文字や東巴經典などの読み書きに関する演習も行なわれている。

### 7.3 「方案」の確定・実施および新たな動向

2003 年 8 月、東巴經典は、「世界記憶遺産」<sup>43)</sup> に申請され認可された。東巴文字および東巴文化の価値が一般的に認められ（その詳細については別稿で述べる予定である）、政府および教育機関も、東巴文化を麗江の教育機関に全面的に導入することを定めた。同年に作成された「麗江市古城区教育局納西文化傳承方案」では、伝承活動の目標が次のように明確に示された。

（学生に）納西言語を推進し、初歩的な納西象形文字を習得させると同時に、納西伝統の手芸、民族舞踊、民謡、童謡、民俗、礼儀などを学習させ、納西族の歴史を了解させるとともに、良好な（納西）言語環境を回復する。

こうした目標のもとで、麗江教育局の文化伝承活動は、次の2つの方向から進められることになった。

①教育側の東巴知識の強化（教員の養成と教育方法の確立）。現在の学校範囲内において、納西語ができる50名の教師を選び、まず納西語の音声表記（アルファベット）、納西象形文字、納西舞踊などを基本的に学習する。次に納西文化の濃厚な地域の文化を考察し、教育方針や授業方法などを検討する。②学生側への教育実施。第1段階では、納西語の普及が主であり、学生が短期間に納西語を把握することを目的とする。第2段階では、納西語能力の基盤のうえに、東巴文字を理解させる。第3段階では、納西族の歴史、民俗、礼儀などの知識を了解させる。ここから学生の民族自尊と自信が生まれ、納西文化の学習が自発的に行なわれることが期待されている。

「方案」が作成され、早速、納西民族語教育のために59名の納西語を話せる教員に納西語専門教師の研修が実施された。しかし東巴文化を教える教師の養成については、いまのところまだ進展がみられない。「東巴文化特色班」の授業は、東巴文化伝習院の協力で各研究機構の研究員が非常勤で担当している。

2003年9月から、古城区（古城の大研鎮および5つの郷）の53の小学校において、1年生から4年生まで約1万人の子どもに対し、全面的な納西語教育が開始されたところである。筆者は2003年10月24日に、古城内にある興仁小学校（「方国瑜小学校」とも呼ばれる）の6年生29名による納西語の授業を見学した。子どもたちにインタビューを行なったところ、3分の2の学生は納西語で話すことはまだ不十分だが、納西語の勉強はおもしろい、と語っていた。子どもたちにとって、納西語の授業は、遊びの延長線上にある楽しいものとして受け止められている。学校側からは、保護者に対して「家庭内の納西語教育」が唱導されている。（図24）

「東巴文化特色班」の授業は以前のまま続けられているが、それらの「特色班」を学校内で増加することも検討されている。「特色班」をもつ学校は文化伝承の基地として一層重視されており、これからも納西文化を全面的に学校教育に導入することを目指して、このような基地の増加が考えられているのである（麗江市古城区教育局納西文化伝承方案2003）。現在はまだ、前述した「②学生側への教育実施」の段階のうちの第1段階である納西語の普及が中心であり、3つのクラスで第2段階の授業が試みられている。そこでの授業内容と担当教師の手配は、東巴文化伝習院が職掌している。

筆者は、2003年10月に黄山小学校で実施されている東巴文授業（生徒数31人）を見学した。授業は、2002年9月に作成されたプログラムに従っており、一文字一文字を書きながら意味を説明し、文字を組み合わせることによって文をつくる

まで進められた。当日は、15の文字によって3つの文を作成する演習も行なわれた。その文は東巴經典の「創世神話」の部分である。担当教師は麗江東巴文化博物館の研究員であった。子どもたちは「東巴文は納西族の文字である」という認識をもち、将来においても何かの役に立つのではと考えている。授業もおもしろく厳格なテストが実施されないことから、前述の古城区興仁小学校と同様に子どもたちは授業を受けることを楽しんでいる様子であった。保護者たちも「現在の麗江の発展と納西族文化のかかわりを実感している。とりわけ東巴文字が子どもの将来就職に役立つかもしれない」と考える者が増えているという。(図25)

また東巴文化の授業の一部分を中学生の美術科の科目に含めようとする動きもある。これによりすべての中学生が東巴文化に接することができるという構想のもと、麗江地方独自の美術教材が編集された。教育局長のインタビューでは、この教材は麗江の範囲内で、中学校の美術の授業において主に用いられる予定であるが、国家の統一美術教育においても参考教材として用いられる可能性があるという。2003年9月に編集中の「美術教材草案」(美術教材草案2003)が編集者により提供されたが、ここで内容を見ることにする。

これは、3つの単元からなり、第1単元は1年生用で、内容としては、以下のよう  
に授業のタイトルごとに構成されている。①納西東巴名文(納西東巴經典名句)、②  
麗江民間の切り紙芸術(麗江剪纸民間芸術)、③麗江編み芸術(麗江編織芸術)、④貼  
紙芸術(芸術拼貼)—風景、⑤納西東巴絵画(納西東巴画)、⑥金沙江崖画、⑦中国  
画—花鳥画、⑧納西族著名画家—周霖の8つの題目がある。

第2単元は2年生用で、①東巴芸術の体験と理解(感受芸術・了解東巴)、②中国  
画—山水、③貼紙芸術(芸術拼貼)—人物、④民族陶芸、⑤民族彫塑、⑥東巴版画、  
⑦民族服飾、⑧麗江古城切手(郵票)、⑨納西族青年画家(納西族年輕画家)—木基  
新の9つの題目となっている。

第3単元は3年生用で、①中国画—人物、②民族兒童画、③東巴彫塑、④麗江壁画、  
⑤麗江建築芸術、⑥書道(書法)、⑦納西書道家(納西書法家)—李群杰の7つの題  
目がある。(図26)

以上のうち麗江、納西族、東巴に関するものは18あり、全教科書の75%を占める。  
このうち東巴文字を内容とするものが2つあり、それ以外の東巴文化にかかわる内容  
の題目が3つある。この美術教材はその後中国・雲南省の教育機関から認可を得て、  
2004年年末に出版され、2005年中使用する予定となっている。

東巴文化の学校教育への導入は2002年から試験的に実施され、2003年9月の新学

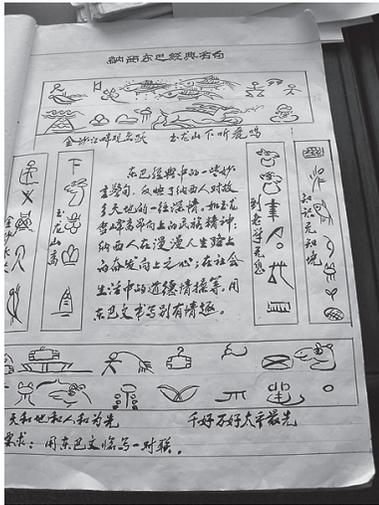


図 26 美術教科書の 1 ページ

期にはその動きがさらに強まり、2004 年以降は一層広範囲において実施されることが予想される。納西族は一般に中国少数民族の中でも漢化がすすみ、尖出した民族運動は見られなかった。しかし、学校教育における東巴文化の伝承活動が契機として、これからの麗江納西族にとって新たなアイデンティティの形成に少なからず影響を与えると考えられる。

## 8 考察

本稿では、東巴文字の伝承と復興運動を歴史的に概観し、その変容を時代背景に即して考察した。まず、1990 年代以来、麗江政府の全面的な支持のもとで行われてきた東巴文字の伝承をめぐって、2003 年 11 月までの麗江の各団体や研究機関のさまざまな動きを、具体的な事例にもとづいて概観した。以下、この地域における東巴文字の伝承活動が有する中国少数民族政策としての意義について、若干の考察を述べておきたい。

冒頭において述べたように 1990 年代以降における東巴文字の伝承活動は、中国の少数民族のあり方において、いくつかの興味深い点を有している。それはまず第 1 に、東巴文字の伝承活動が、経済的な効果から派生した「イメージ戦略」として実施されている点にある。本来、東巴文字の使用は、東巴教の祭司に限られ、宗教の経典を書いたり、宗教に関わる内容を暗誦したりするためだけに用いられていた。したがって、その伝承活動は、東巴祭司の家庭において、自ら後継者（息子や親戚の男子）へ伝承するのが慣わしであった。東巴文字は、東巴祭司を養成するための一環として行われたのであり、一般の納西族の人々とは接点をもたなかったのである。漢文化の受容や宗教に対する否定的な政策もあり、東巴教は近年まで衰退し続けてきた。東巴祭司となる人も激減し、中華人民共和国建国後、とりわけ文化大革命から改革開放までの 20 数年間のあいだは、東巴文字の伝承はほぼ空白の時代であった。1990 年代前半において、東巴文字に対する研究者の意識は高まったが、伝承活動という観点からみれば、極めて狭い範囲にとどまるものであった。

これに対し、1995 年以降における麗江での伝承活動は、観光業の発達に伴う社会

的な変容によって活発化することとなった。宗教的な目的をまったくもたず、あくまで観光資源の掘り起こしという課題が最優先となっている。東巴文字は宗教の基盤から切りはなされ、新たな社会基盤を獲得したことによって、伝承が行われているのである。研究者や生き残った老東巴による、一般の納西族を対象とした東巴文字の伝承活動は、宗教的な内容とはならず、納西語の習得と一体化した一個の教育科目となりつつある。

無論、筆者はこのような「イメージ戦略」であることをもって、現在の東巴文字の伝承活動を否定しようと考えているのではない。それどころか、本来、「文化」と呼ばれるものの多くが、近代化の過程において国家の「イメージ戦略」として「つくられた」ものであることは、近年の近代国家と文化にかかわる研究（例えば（アンダーソン 1991/1997））などからも明らかとなりつつある。この点で、本稿で扱った東巴文字に関する事例は、少数民族の「民族文化」と呼ばれるものが、どのような過程で創出されるのかを考察する上での、貴重な事例と考えることもできよう。

しかし筆者が東巴文字の伝承活動に着目するのは、これだけの理由からではない。その理由を説明する前に、確認しておきたいのは、この伝承活動が、経済的な効率を求めて行われ、しかも比較的無計画なかたちで実施されている点である。たとえば麗江東巴文化博物館附属納西東巴文化学校では、「麗江の一般民衆に宗教文化を普及すること」の目的において文字の伝承を行ない、雲南社会科学院東巴文化研究所では、「辺鄙な地域で伝統宗教を復興すること」が目的となっている。さらに教育局が主導する学校教育における東巴文字の伝承活動は、納西族の伝統文化の継承が目的とされ、言語教育と連続して東巴文字の指導が行なわれてきた。しかし、それぞれの活動における東巴文字普及の効果は、当初の目的とは大きく違っている。基本的にどの活動も、宗教活動を全民に普及させ、文化の保護や発展を目指すという「文化返民」の考えに基づくものではある。しかし直接のプログラムに参加した者ですら、東巴教信仰に対する興味は高いものではなく、一般民衆への普及には程遠い状況にある。雲南社会科学院東巴文化研究所においては、優秀な何人かを輩出することに成功しているものの、社会全体の宗教活動に対する需要は低いままであり、彼らが伝統的な意味における宗教者として活躍する場はほとんどないと考えられる。これらの機関以外にも、さまざまなかたちで東巴文化の伝承活動が行なわれているが、かつてみられたような宗教活動の復興には結びついておらず、伝承されているのは、文字に関する知識や舞踊などの技術に止まっている。

筆者がこの伝承活動に注目するのは、この無計画性にもかかわらず、この伝承活動

が一定以上の効果をあげているという点にある。この効果とは、単に経済上の効果にとどまらない。むしろ民衆に対する伝承についても、比較的好意的に受け止められているという事実がある。例えば、筆者が小学校を訪問した際も、決して分かり易いとはいえない東巴文字の授業を、子どもたちは楽しそうに受けており、それを学ぶことの不自然さは気にもとめていない様子であった。また土産物市場における納西族の若者たちのなかにも、自らの商品に書く東巴文字を正確なものとするために、積極的に納西語を学ぼうとするものが少なからず存在した。実際に東巴養成機関において教育を受けた新東巴たちにいたっては、言うまでもない。筆者は彼らの東巴文字や東巴文化に対する意識のなかに、納西族の新たなアイデンティティーの萌芽をみることはできないであろうかと考えるのである。

ここには、さらにいくつかの考察すべきテーマが存在している。庄司は、かつて中国の少数民族政策が、「少数民族に平等な言語権を実現する」ことを理念としてかけ、「民族的自立を求める少数民族とそれを抑圧する中央権力との力関係という単純な図式だけでは捉えきれない」側面の存在したことを指摘している（庄司1987）。ここで取り上げた東巴文字の伝承活動も、その枠にはおさまらない特異な事例を示しているといえる。納西族の場合、漢語や漢文化に対しては歴史的に見ても寛容であった。学校教育において納西語を教えることに消極的であったのも、将来的な利用価値において漢語の優位性を納西族自身が認めていたからである。東巴文字や納西語が学校教育において実験的に導入された現在においても、漢語の優位性への意識は変わっていないと考えられる。しかし、現在そのような実利をはなれたところで、これらの教育がおこなわれ始めている。すなわち東巴文字および納西語の教育が、純粋に納西族の民族的自覚という観点から行おうとする人々も存在と考えられるのである。経済的な側面が大きいとはいえ、このような民族教育を国家が容認あるいは黙認しているという点も興味深いといえよう。少数民族の民族的自覚を高めるという行為は、原則として国家による国民の統一とは究極的には矛盾するものである。政府の容認・黙認は、納西族が比較的小集団で同化も進んでおり、極端な分離運動に向かう恐れが少ないことにもかかわっていよう。これはチベット族やモンゴル族、ウイグル族に対してとられた言語政策とは大きく異なる点である。

とはいえ、経済的な要求を媒介として形成された民族的アイデンティティーが今後どのように変容してゆくのか、また国家がそれをどのように容認（もしくは抑圧）してゆくのか、現時点において断定的なことを言うのは困難である。現在、学校教育において、アルファベット式の表記法による納西語の教育依然として試行の段階にあ

る。しかし、さらに、現行のアルファベット式の表記法にさらに「たちおくれた」東巴文字は、現在、突然、納西族の文字として教育の場で教え、社会的に普及されることは困難であろう。いずれにせよ、麗江地域における東巴文字の伝承活動は、まだ端緒についたばかりであり、今後も注目し続ける必要がある。

## 謝 辞

現地調査に当り雲南社会科学院東巴文化研究所所長趙世紅先生、同研究所研究員李靜生先生、王世英先生および和品正先生、同研究所の在学東巴の方々、麗江東巴文化博物館館長李錫先生、同博物館研究員の和繼全先生と和琛先生、同博物館所属麗江納西東巴文化学校の先生方と2002年8月に在学中だった学生のみなさん、麗江県誌所主任李汝明先生、麗江教育局局長和燦鑫先生、楊一紅先生、麗江黄山小学校と麗江興仁小学校の教師および生徒の方々、麗江東巴文化伝習院院長の黃琳娜先生、そして麗江市古城区委宣传部部長劉劍春氏などの方々よりご協力頂きました。

また、本稿の仕上げの段階では、庄司博史先生、査読の3名の先生方から貴重な意見をいただき、記して感謝します。

この場を借りて、以上の方々に深く感謝の意を表します。

## 注

- 1) 研究上の設定地域はもと麗江納西族自治州であったが、2003年9月に、行政上、麗江納西族自治州は「麗江玉龍納西族自治州」と「麗江古城区」の2つの部分に分けられた。本稿にあって、その前後の資料を使われるため、一般に知られている略称の「麗江」を使用する。
- 2) 日本においては「ナシ」と表記される場合もあるが、中国語文献を多く引用することで、整合性を保つうえから、本稿では「納西」と統一表記する。
- 3) 上記注2)と同理由から、この論文は「トンパ」は「東巴」という表記で統一される。
- 4) 筆者はかつて1996年麗江地震後、7月から1997年2月まで、「雲南師範大学地震支援講師団」の一員として約半年間、麗江で教育支援活動をしなから、研究上の資料収集を行った。1997年夏、再び麗江を訪問し、雲南省社会科学院東巴文化研究所の研究者と東巴文字についてインタビューすることができた。さらに本研究を進めるにあたって、2001年6月に約1ヶ月間、9月に10日間、2002年には3ヶ月間、2003年にも3ヶ月間の計4回、のべ8ヶ月間にわたって現地調査を行った。この間、多くの現地人や政府関係者および東巴文化研究者と会談や意見交換を行い、現地考察を重ねた。現地調査は大きく分けて、麗江における近年の政治的、文化的、経済的動向について、文化保護や学校教育活動について、土産品市場における東巴文字の使用状況についての3点である。
- 5) 「東巴を重視しながら、東巴教活動を支持し、地方の統治に東巴を利用することがあった」。(方国瑜 1995: 39-40)。
- 6) ある伝説によれば、東巴教の第2代教祖のアミシュレは、麗江を支配する一族に暗殺されたと伝えられている。それが事実か否かを実証することはできないが、この伝説から、少なくとも東巴教と麗江の統治者一族との徹底的な対立があったことを読み取ることができる。さらに伝説は、アミシュレは毒酒と知りながらそれを飲むしかなかったというかたちで終わっている。つまりこれは、衝突の結果、東巴教が支配者一族に敗れたことを意味していると推察される。(楊正文 1988: 12-20)。

- 7) 1723年、清政府は、各少数民族地域の土司の権力を失わせることを重要な目的として、少数民族に対して政府の唱導する慣習を全面的に強制した。これは当時の清政府が、自らの満漢的な生活様式と儒教文化の倫理道徳観に照らして、少数民族の社会生活を低級なものとし、彼らを知り無知と判断したからにほかならない。これは「改土帰流」政策と呼ばれている。「改土帰流」により、漢文化教育を納西族全体が受けるようになり、倫理や道徳を含め、社会生活の細部にわたって清政府の意向に従うことが強制されていった。しかし、一方では「改土帰流」は、中国西南地区の少数民族の政治や社会、文化に重大な変革を起し、彼らにとっては伝統文化の破壊と新たな文化の形成という両義的な意味をもつことになった。(楊福泉 1998: 99; 塚田誠之 2003)。
- 8) 現在「東巴文化研究の父」と称される方国瑜は、大学時代(1920年代)に北京で指導を受けた教師に「東巴文字」のことを聞かれた際、自民族の象形文字が研究者に注目されていることを知り、はじめて東巴文字のことを考えるようになった、と述べている。また、20世紀初頭の状況について方国瑜は、「東巴教は鄙陋(原始的で、恥ずかしいという意味)とみなされ、東巴文字は限られた東巴にしかわからなかった」と記述している(方国瑜 1995: 1-2)。
- 9) 遠く欧米から中国の「秘境」を訪れた人たちが東巴文字を発見し、関心をよせていた。1867年、フランス人宣教師のP・デゴダン(P. Desgodins)が、納西族の宗教者である東巴が書いた経典の複写をパリで紹介した。その後、雲南の麗江から同様の経典を西洋へ持ち帰り、欧州では高い値で売買された。このようにしてやりとりされた経典の一部は、イギリスの大英博物館でも展示され、大きな反響を呼んだ。
- 10) その後、アメリカ人のJ・F・ロック(J. F. Rock)を中心に東巴経典の翻訳なども進められ、研究のレベルでも注目を浴びるようになった。中国国内においても、1930年ころから本格的に東巴文字の研究が行なわれはじめ、大きな成果がもたらされた。方国瑜は自民族の文化を追求するなかで、納西族の起源についても言及し、「納西族羌人」説を唱えた。この説は、納西族の起源を説明するうえで、いまだ最も有力なものと考えられている。その後最も重要な研究成果であることとなる『納西象形文字譜』は、いくつかの理由から当時出版されることはなかったものの、1936年にはその草稿が完成していた。一方、方国瑜の友人の李霖燦はその影響を受け、長期間麗江地区で調査を行ない、東巴文字を中心に東巴文化研究を深めた。その際李は、研究のために、地元の言語である納西語まで習得した、といわれている。彼は1945年に『納西族象形標音文字字典』を出版している。
- 11) J・F・ロック(J. F. Rock)は1921年から1949年までの長期にわたって、麗江で現地調査と研究を行なった。彼は多くの資料を収集し、知識の豊かな東巴の助力を得て、大量の東巴経典を翻訳した。彼が書いた多くの調査報告書は、人類学の貴重な資料として、現在でも高く評価されている。ロックは、帰国後も1962年まで研究発表を続け、西欧における「納西学」の父と呼ばれた。彼の研究において最も評価されたのは、『納西英語百科詞典』であった。ロックは中国においても「納西文化の宗教学と民族学の研究において特別に重要な意味をもつ人物」とされる。
- 12) 1929～1995年、漢族、建国後、麗江県産産党委書記、雲南省工業管理局局長などの職を歴任した。60年代に、東巴経典を翻訳することにおいて、重要な貢献を果たした(ト 1999: 169-170)。
- 13) 納西族、麗江出身、1983年から雲南社会科学院東巴文化研究所の研究員として、東巴文化の研究をする。1982年に「納西族東巴文字と甲骨文の比較研究」を発表してから、李静生は注目を浴びるようになった。これは「最初の東巴文字と甲骨文の関係について対比して考えた論文として、とても意味のある試みであった」(王元鹿 1988: 10-11)。
- 14) 納西族、1943年に世襲「大東巴」家で生まれ、1968年雲南大学漢文学部(中文系)を卒業、迪慶納西学会会長、東巴文化の研究発表が多い。
- 15) 西田龍雄は1992年になって麗江に赴き、自らの目でその「生きている象形文字」を確かめた。彼は2001年に再版した同書の「あとがき」のなかで、近年の中国における納西文化および東巴文化の多大な研究成果を認め、「納西文字と納西文化についてあらためて書くとなれば、本書『生きている象形文字』とはずいぶん違った内容になっているに違いありません」と語った(西田 2001: iii)。
- 16) 『創世紀』、納西族の民族についての民話伝説的な記録である。
- 17) 1923～1996年、麗江出身。東巴文化を熟知、麗江県委副書記を歴任した。1981年から東巴文化研究室(のちに改名し、「研究所」となる)の主任(ト 1999: 169)。

- 18) 1984年3月23日、昆明で、和万宝は郭大烈の要請に応じて彼の編集した『東巴文化論集』に「序」を書いた。これはそのなかのコメントである。
- 19) 地方官僚であった和万宝が指摘したことである(趙世紅 2002a: 3-5)。
- 20) 和が1991年に死去した際、李靜生は研究所を代表して、『撫念和万宝同志』のなかにおいて、「和万宝がいなかったら東巴文化研究所は存在しなかったはずであり、東巴文字の研究も大きく遅れていたにちがいない」と述べ、和万宝の業績を称えた(李靜生 1991: 11)。
- 21) 1984年、麗江納西族自治州政府により設立された。当時名称は「麗江納西族自治県博物館」であったが、1995年、麗江県以外の機関に対して、この博物館のことを「麗江東巴文化博物館」と称し始め、1999年、この名が正式にあらゆる面でつかわれることになった。
- 22) この条例により、今後東巴文字を含む東巴文物は麗江東巴文化博物館によってのみ購入、収蔵することができ、ほかの個人や団体は東巴文物を購入することが禁止された。そして逆に、個人が所蔵している東巴文物は博物館へ寄贈することが奨励されることになった。また個人で所蔵している東巴文物を売買したり(商用目的であるか否かにかかわらず)、外国人に譲り渡したりすることも禁止された(『雲南省麗江納西族自治県東巴文化保護条例』2001: 1-4)。
- 23) 1965年、麗江政府により設立され、1970年から仕事を開始。麗江の歴史文化や、東巴文化などに関する展示会の開催や、劇、音楽、美術、ダンスなどの振興を主要な目的とする組織。
- 24) 「対聯」とは一定の規則に従い文字を3枚の紙に書き、建物の入り口または部屋の中にメインの飾り場の両側と上に張るものである。右側に張るのは「上聯」、左側に張るのは「下聯」、上に張るのは「横批」と言う。「上聯」と「下聯」は言葉の意味が対照的になる対句であり、「横批」は対句の意味をまとめたり、他の意味に転じたりする短い1句である。中国では古来、「春節」を祝う時に赤い紙に書き、張り出されるものは、「春聯」と言う。
- 25) 筆者が見ることができたのは、取手の部分が壊れたものひとつだけであった。これは円筒形で、高さ13センチ、直径8センチ。色は白く、外側の上段の周囲にオレンジ色で東巴文字が書き込まれている。
- 26) 1999年、中国・麗江国際東巴文化芸術祭を麗江で開催。300名の学者が参加、東巴文化學術討論会、東巴音楽、踊り、儀式、書道などの展示活動を行なった。
- 27) 麗江文化局長および麗江県東巴文化博物館長李賜へのインタビューによる。
- 28) 「漢化」された古城の建築を進めた王族である木氏が、早くから漢文化を推進した。木氏が麗江を治めるようになった明の時代には、漢学を習うことが貴族の特権と象徴になっていた。木氏は納西族の伝統文化(東巴文字を含む)を時代から取り残されたものとみなし、納西建築についても漢族の様式を取り入れたのである。東巴文字に関して、つい近年までは古城内において目にすることはほとんどなかった。古城は納西族が取り入れた先進文化が集まる場所であり、1980年代は納西族の東巴文字よりも、漢族書道の文字が数多く記されていた。
- 29) 麗江は古来、四川省から雲南省の北部町の大理、保山、ミャンマー、インドなどへ向う南西シルクロード線が通る交通の要地であり、雲南省南部町の思茅から大理、ラサ、ネパール、インドへと続く茶馬古道への乗り換え場所でもあった清の時代からは、チベットとの貿易が大きく発達し、麗江現地商人と外来商人が古城に店舗を出すようになった。古城の四方街など主要な道の両側にあるこれらの店舗は、当初から商業貿易と住宅との2つの機能をもつものとして建てられていた。伝統的に、道に面する側は商店が生活雑貨などの手造り工房として使用され、その反対側は住宅として使用されていた(李汝明ほか 2001: 389; 鎌澤久也 2002: 26; 木霽弘 2001: 9)。
- 30) 1990年代はじめには、観光客の求めに応じ、東巴木盤など東巴文字をあしらった土産品を扱う店が増え始めた。のちに、古城が「世界文化遺産」に認定され、観光業が急速に発展したことにより、衛生面や観光業発展の需要などを考慮して、政府は市場において日用品を売る仮設店舗を取り締まり、土産品店の出店を積極的に推し進めた。1997年ごろからは、観光客が大量に麗江古城を訪れた。東巴文字がデザインされた商品は観光客に大変人気があり、大きな収入源として多くの土産品が出回るようになった。2000年以降、政府は、古城において積極的に東巴文字を使用するように奨励するようになり、東巴文化を麗江納西族の象徴的イメージとすることを推進している。2004年の現在、古城は土産品販売所としても認知され、麗江で最も東巴文字を見ることができる場所となった。古城内で経営されている

商店は3,000軒あまりにのぼり、民宿を営む店以外はほとんどの店が土産品とかがわっている。

- 31) 筆者はこの古城の土産品に現れる東巴文字について詳細な調査活動を行なった。特に2001年には、東巴文字土産品の基本的な状況を調査している。調査を進めていくに従って、より正確に状況を把握するために、調査地域を限定したうえで、店舗数や経営状況および観光業とのかかわりなどを詳細に調査することにした。そこで「古城の筋骨」と呼ばれる古城西北部の新華街の売店集中区を、調査地域として設定した。2002年の調査では、新華街の全体観察とインタビューを中心に調査を進めた。調査項目は、土産品販売店の店舗数や、個々の店舗の経営状況、および経営者の概況などである。新華街の土産品販売店の歴史は浅く、麗江政府ですら、その状況についての正確な数値を把握しているわけではない。筆者は自らの現地調査に基づいて店舗地図を作成し、店舗経営者や経営内容についての資料を収集することにした。また東巴文字を多く用いている店については、さらに詳しい個別調査を行ない、扱われている東巴文字土産品について影像として記録した。これらの詳細な記録は、(高2004a: 83-159; 2004b: 13-44)を参照されたい。
- 32) 古代「南詔」王国には宝兵器が存在し、それを兵士に配り、戦争をすると、必ず宝兵器のおかげで、勝利を獲得する。隣国が美人を使っての「南詔の兵器」を盗んだのち、南詔は失敗の味を知ることになった。このことは、全国に「宝兵器を失うと勝利も失う」という教訓を与えた。現在、納西族にあっては「文字は兵器に如し」と考えられている。
- 33) 第1冊『納西象形文字』、第2冊『納西族伝統祭祀儀式』、第3冊『納西象形文古籍』(いずれも雲南人民出版社、2003年)のこと。この3冊の教科書は2002年に草稿が完成し、2003年6月雲南人民出版社より出版された。
- 34) 1980年代から研究著作を多数発表してきた東巴文化研究の納西族の代表研究者である。
- 35) 雲南省社会科学院東巴文化研究所に属する研究員であり、近年麗江東巴文化市場の需要に応じて東巴文化の書籍を出版することで注目された研究者である。彼は研究者でもあるが東巴祭司の儀式においてもよく祭司役をしている。
- 36) 筆者の和力民へのインタビューおよび(『第2届國際東巴文化芸術節學術研討會簡報』2003)。
- 37) 筆者は現地調査の際、雲南省社会科学院東巴文化研究所において、関係者や東巴養成課程の指導者へのインタビューを行なった。また、養成活動に関する資料についても閲覧と複写をすることができた。収集した資料のうち、「東巴文化伝人培養項目的階段性小結」は研究所が東巴養成課程についてまとめたもので、現在のところ外部には公開されていないが、特別に資料の使用を研究所より許可された。
- 38) 「雲南省社会科学院東巴文化研究所東巴養成階段性小結」における「東巴資料」の表一および表二を参照して、作成した。
- 39) 2003年9月から11月に、研究所は民間および政府の観光開発団体と協力し、東巴文化を宣伝するため、観光地で東巴芸術(祭祀の踊りおよび東巴絵画、東巴文字の書写など)を披露している。和秀東ら2人は、研究所の近くの東巴文化展示場に勤め、ほか5人は麗江郊外の玉水寨風景区に勤めている。その2箇所の東巴文化展示場では、研究所が学術指導を担当して一定の報酬を受けているようである。
- 40) B氏は2003年はじめにアメリカで「中国西南納西族文化学年」へ参加して東巴祭祀儀式の「祭署」(自然を祭る儀式)を披露し、「人気祭司」という評価を受けた。また、2003年8月に上海で開催された「国際芸術家周」でも、B氏らが東巴經典に書かれた伝統民話を詠唱し、東巴祭祀儀式と舞踏を披露した。彼らは東巴の代表的人物として、麗江および世界の東巴文化の伝承と研究の領域で注目を集めた(趙世紅2003: 9・8: 1)。
- 41) 筆者の現地調査でも、古城の売店でアルバイトをしている地元出身の納西族の少女が、「納西語は話せないけど、最近になって勉強している」と話していた。
- 42) 1957年、中国政府により、アルファベット式納西文字草案が作られ、一部の納西族小学校教師や幹部の間で推行することを試みたが、1958年中止された。1981年初、草案が修訂され、『納西文字方案』が定められた。1982年から、この文字を用いた教育が麗江納西族自治县内で断続的に行われたが以降中断していた。(『中国少数民族文字』1992: 214-218)
- 43) 「世界遺産」のうちよく知られるのは「世界文化遺産」と「世界自然遺産」と呼ばれるものである。これらは自然環境や建造物などにおいて、珍しく、歴史的にも重要であるものが対象とされている。この世界遺産の延長線上に、ユネスコは1993年から、「世界の記憶プログラム」を実施している。これは、歴史的に貴重な文献遺産(手稿、文献、口伝、写真など)

を散逸や汚染から守り、保護するという国際宣言である。保護の対象となる文献遺産は「世界記憶遺産」として登録され、一定の基金によってデジタル化や保存作業などが行なわれることになっている。「世界記憶遺産」に登録された文献などについては、「世界の記憶プログラム」の特定標識を使用することが認められている。

## 文 献

### <著者名で引用>

- アンダーソン・ベネディクト (Anderson, Benedict R. O'G.)  
1991 『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』(白石さや・白石隆訳) 東京：NTT出版。
- 伊藤清司  
1979 『日本神話と中国神話』 東京：学生社。
- 欧陽堅  
2003 「再創麗江旅游新輝煌」『為麗江騰飛——探索与实践』 pp. 184-190, 昆明：雲南人民出版社。
- 王元鹿  
1988 『漢古文字和納西東巴文字比較研究』 pp. 10-11, 上海：華東師範大学出版社。
- 王世英  
2003 「東巴文化中的納西古代諸文化探析」『雲南省社会科学院東巴文化研究所論文選集』, 昆明：雲南人民出版社。
- 郭大烈  
1999a 「関与東巴文化及其研究」『東巴文化論集』 昆明：雲南人民出版社。  
1999b 「納西族東巴教儀礼」『西南中国納西族・イ族の民族文化——民俗宗教の比較研究』 東京：勉誠出版。
- 郭大烈・楊世光  
1999 『東巴文化論集』 pp. 1-3, 昆明：雲南人民出版社。
- 郭大烈・和志武  
1999 「東巴教的派系和現状」『東巴文化論集』 pp. 38-54, 昆明：雲南人民出版社。
- 鎌澤久也  
2002 「南方陸上シルクロードをゆく」『翼の王国』(全日空) 394: 26。
- 雅納特 (Janert, K. L.)  
1998 「洛克收集的東巴經及其在德国的藏本」(『德国東方手稿目錄』第7部第1卷『納西手寫本目錄』序言)『國際東巴文化研究集粹』 pp. 215-221, (楊福泉訳) 昆明：雲南人民出版社。
- 君島久子  
1978a 「人類遷徙記」(訳)『中国大陸古文化研究：納西族特集』 pp. 17-31 東京：風響社。  
1978b 「納西族の伝承とその資料——「人類遷徙記」を中心として」『中国大陸古文化研究：納西族特集』 pp. 4-16 東京：風響社。
- グーラート・ピーター (Goullart, P.)  
1963 『忘れられた王国』(高地アジア研究会訳), 東京：ベースボール・マガジン社。
- 高 茜  
2003a 「1990年代以降の中国雲南省麗江における納西族東巴文字の変容」(博士論文) 神戸大学。  
2003b 「1990年代以降の中国雲南省麗江における納西族東巴文字の政治的経済的変容」『デザイン史学』 2: 13-44。
- 庄司博史  
1987 「文字創製・改革にみた中国少数民族政策」『国立民族学博物館研究報告』 12(4): 1181-1214。
- 諏訪哲郎  
1994 『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』 東京：学習院大学。

- 趙世紅  
 2002a 「廿年甘冷寂，百年自輝鏗——東巴文化研究所成立20周年及『納西東巴古籍註全集』出版之際」『國際納西學學會通訊』(3): 3-5。  
 2002b 「淺談東巴文化的保護和搶救」(原稿)。  
 2003 「東巴文化在上海國際藝術家周展演」『麗江日報』9月8日付，第1版。
- 張文凌  
 2003 「失去他們，我們拿什麼和世界對話」『中國青年』9月9日付，第8版。
- 塚田誠之編  
 2003 『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』東京：風響社。
- 納西族調查組  
 2001 『雲南民族村寨調查 納西族——麗江黃山鄉白華村』昆明：雲南大學出版社。
- 西田龍雄  
 2001 『生きている象形文字』東京：五月書房。
- 方國瑜  
 1995 『納西象形文字譜』pp. 1-7 (弁言), pp. 1-88 (本文), 昆明：雲南人民出版社 (初出1981, 成稿1936)。
- 卜金容  
 1999 『納西東巴文化要籍及傳承概覽』pp. 169-170, 昆明：雲南民族出版社。
- 孟徹理 (Mckhann, C. F.)  
 1998a 「納西宗教綜論」『國際東巴文化研究集粹』(楊福泉訳) pp. 91-113, 昆明：雲南人民出版社。  
 1998b 「論祭天儀式的時間安排和參與人員」『國際東巴文化研究集粹』(楊福泉訳) pp. 114-136, 昆明：雲南人民出版社。
- 木 琛  
 2003 『納西象形文字』(麗江東巴文化學校教材・第1冊) 昆明：雲南人民出版社。  
 2003 木琛著『納西象形文字古籍』(麗江東巴文化學校教材・第3冊) 昆明：雲南人民出版社。
- 木霽弘  
 2001 『茶馬古道考察記事』昆明：雲南教育出版社。
- 山田勝美  
 1979 『生きていた絵文字の世界』東京：玉川大學出版部。
- 楊一紅  
 2003 「納西文化傳承初探」(2003年中國麗江第2屆國際東巴文化藝術節學術研討會配布資料——論文原稿)。
- 楊世光  
 1999 「東巴文化研究的新收穫」『東巴文化論』昆明：雲南人民出版社。
- 楊正文  
 1988 『中甸民間故事選』pp. 12-20, 昆明：雲南人民出版社。  
 1998 『最後的原始崇拜——白地東巴文化』昆明：雲南人民出版社。
- 楊福泉  
 1998 『多元文化和納西社會』pp. 18-99, 昆明：雲南人民出版社。  
 1999 「納西族」『雲南少數民族概覽』pp. 464-467, 431, 445, 昆明：雲南人民出版社。  
 2003 「略述麗江市文化旅遊資源的保護與發展」(2003年中國麗江第2屆國際東巴文化藝術節學術研討會配布資料——論文原稿)。
- 李國文  
 1998 『人神之媒——東巴祭司面面觀』昆明：雲南人民出版社。
- 李汝明ほか  
 2001 『麗江納西族自治縣志』pp. 389-415, 昆明：雲南人民出版社。
- 李靜生  
 1991 「撫念和萬寶同志」『麗江通信』(11) 昆明：雲南民族出版社。  
 2003 「納西東巴文的創制及其他」『東巴文化研究所論文選集』pp. 172-194, 昆明：雲南民族出版社。
- 李霖燦  
 2001 『納西族象形文字事典』昆明：雲南民族出版社。

高 中国麗江納西族における東巴文字復興運動

林向蕭

2002 「東巴文化是否「即将在这个地球上消失」」『國際納西学学会通訊』(3): 33-34。

洛 克 (Rock, J. F.)

1998 「納西人驅逐使人致病之惡鬼的儀式」『國際東巴文化研究集粹』(楊福泉訳) pp. 27-39, 昆明: 雲南人民出版社 (原文出 National Geographic Society Magazine, Vol. xlvi, no. 5, 1924)。

1999 The Ancient Na-khi Kingdom of Southwest China 『中国西南古納西王国』(宣科編訳) 昆明: 雲南美術出版社。

和繼全ほか

2003 『納西族伝統祭祀儀式』(麗江東巴文化学校教材・第2冊) 昆明: 雲南人民出版社。

和向紅

2001 「熱烈祝贺「雲南—香港旅遊及投資促進活動周」隆重举行——李錫和他的東巴王国」『香港文匯報』10月9日付, B23版。

和万宝

1999 「序」『東巴文化論集』pp. 1-3, 昆明: 雲南人民出版社。

Janert, K. L. (ed.)

1965 *Na-khi Manuscripts*. (compiled by J. F. Rock) Wiesbaden: F. Steiner.

Mackerras, Colin

1996 *China's Minority Cultures Identities and Integration since 1912*. New York: St. Martin's Press New York.

Rock, J. F.

1972 *A Na-khi-English Encyclopedic Dictionary*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

## <著書名, 論文名で引用>

『雲南省麗江納西族自治県東巴文化保護条例』

2001 麗江納西族自治県人民代表大会常務委員会。

「全方位搶救東巴文化」

1998 納西学研究会。

「東巴文化伝人多」

2002 『國際納西学学会通訊』(3): 18, (資料源『雲南信息港』, 2002年5月15日付)。

『第2屆國際東巴文化芸術節論文提要』

2003 第2屆國際東巴文化芸術節組委會。

『第2屆國際東巴文化芸術節學術研討會簡報』(1, 2, 3)

2003 第2屆國際東巴文化芸術節組委會。

『中国少数民族文字』

1992 中国社会科学院民族研究所・国家民委文化司, 中国蔵学出版社。

「著名学者費孝通談納西文化」

2002 『麗江日報』5月27日付, 第1版 (資料源『雲南日報』, 日付などは不詳)。

「東巴文化伝人培養管理条例」

2001 雲南省社会科学院東巴文化研究所。

「東巴文化伝人培養項目的階段性小結」

2003 雲南省社会科学院東巴文化研究所。

『納西族図画文字《白蝙蝠取経記》/傅懋勳』

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編。

「美術教材草案」

2003 麗江教育局芸術教育研究室。

「保護東巴文化的戰鬥已經打响——東巴文化体表性伝承点簡介」

2003 『第2屆國際東巴文化芸術節學術研討會簡報』(3), 第2屆國際東巴文化芸術節學術組 (和繼全・白郎整理)。

「麗江市古城区教育局納西文化伝承方案」

2003 麗江市古城区教育局。

『麗江通信』(11)

1991 麗江通信編集室, 雲南民族出版社。

「麗江納西族東巴文化學校東巴文化傳承教科書草案」

7.2 麗江納西東巴文化博物館。

「麗江納西東巴文化學校東巴文化傳承骨干培訓班簡況」

2003 麗江納西東巴文化博物館。



図3 祭祀を行う現在の東巴祭司

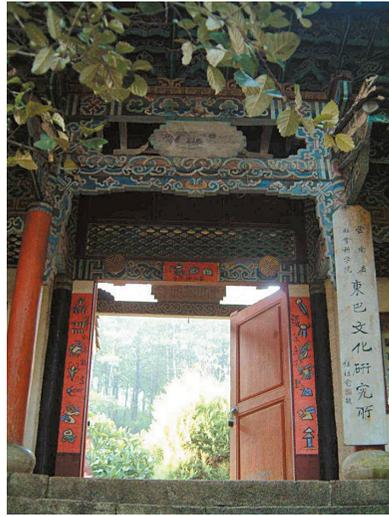


図5 雲南省社会科学院東巴文化研究所



図10 東巴文字商品の販売店舗



図14 Tシャツを販売する店舗



図22 東巴經典（真中の白紙のものはB氏の手書きのもの）

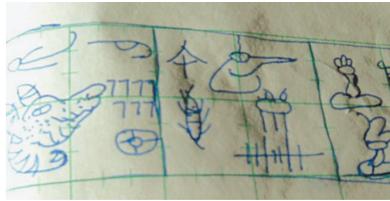


図25 黄山小学校での東巴文字の授業（上）  
生徒の宿題（下）



図23 観光客へ東巴儀式の紹介

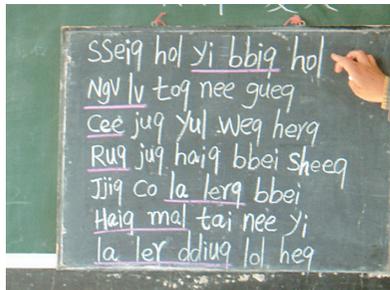


図24 興仁小学校(上)  
アルファベットを使う納西語の授業(右上・右下)